

【詩意】 あなたはお年よりの親ごさんに別れてでかけられるが、このちはおうちでは貧しいためにおこまりになるであらう。あなたはこの地の江山でやつれてをられた人だが、こんどは吏部のめがねにかなふためにあちらで長逗留をする客となられる。今やこは秋風が吹いて竹の色冷かであるが、あちらへつかれるころは夜雪などふりて鞏縣あたりの梅は春げしきを呈することであらう。ご老親が高堂であさばんあなたのことを念うてをられるから、任官のうへりつばな衣服をあらたに着ておかへりになるがよろしからう。

憑孟倉曹將書覓土婁舊莊

平居喪亂後。不到洛陽岑。平居喪亂の後、到らず洛陽の岑。

爲歷雲山問。無辭荆棘深。爲に雲山を歴て問へ、辭する無かれ荆棘の深きを。

北風黃葉下。南浦白頭吟。北風に黃葉下る、南浦に白頭の吟をす。

十載江湖客。茫茫遲暮心。十載江湖の客、茫茫たり遲暮の心。

【字解】 〔一〕土婁舊莊 土婁は地名、河南偃師縣に在り、作者の莊のある所なり。浦氏は「此、當にこれ偃師の舊墟、謂はゆる陸渾莊なる者なるべし」といへるが、蓋し然らん。卷一「奉寄河南韋尹丈人」詩の「尸鄉餘土室」の句解（上卷六四頁）を併せ看よ。〔二〕南浦 魚復浦をいふと。楚美人兮南浦は楚辭にみゆ。〔三〕十載 乾元元年冬に作者かつて洛陽に往き次年春華州に歸る。乾元元年より大曆二年丁未に至りて十年なり。〔四〕茫茫 はつきりせぬ貌。

【題義】 孟倉曹にたのんで手紙をもつていつてもらひ土婁にある舊莊宅の様子を問うてもらふ詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 自分はふだん喪亂以後には、洛陽にいつたことがない。あなたはこんどはわたくしのために雲山を歴て（土婁の舊莊のさまを）問うてください、荆棘がふかく生えてゐるであらうとそれにはとんちやくなさらずに。いま北風が吹いて黃葉がおちる。わたくしは南浦にあなたを送つてかやうな白頭の吟をいたします。十年も江湖に飄泊の客となつてゐるこのわたくしは晩年の心に於て前途まつたくあてどなくばんやりとしてゐるのである。

簡吳郎司法

有客乘舸自忠州。客有り舸に乗じて忠州よりす、

遣騎安置瀼西頭。騎を遣はし安置せしむ瀼西の頭。

古堂本買藉疎豁。古堂本買ふは疎豁なるに藉る、

借汝遷居停宴遊。汝に借して遷居せしめて宴遊を停む。

憑孟倉曹將書覓土婁舊莊 簡吳郎司法

【字解】 〔一〕吳郎司法 吳郎は作者の親戚、詩に朝臣とあるによれば妻君どうしが姉妹なるものか。府州には司法參軍事の官あり。〔二〕舸 こぶね。〔三〕忠州 夔州の上流にあり。〔四〕安置 おちつかせ

雲石熒熒高葉曙 雲石熒熒たり高葉の曙

風江颯颯亂帆秋 風江颯颯たり亂帆の秋

卻爲姻婭過逢地 卻つて姻婭過逢の地と爲し、
「さむや。」

許坐曾軒數散愁 曾軒に坐して數愁を散すること許

樹の葉ならんといふ。【三】風江 風の吹きわたる江。【四】却爲 家主が借家人にたのむものゆゑ「却つて」といふ。【五】姻婭 姻の父母と婿の父母とは相謂うて婚姻となす。婿は相謂うて姪となすと「爾雅」にみゆ。吳と作者とは「あひむこ」の關係に在るものならん。【六】過逢 訪問してであふ。【七】曾軒 層軒なり。【八】散愁 作者がうさばらしをするなり。

【題義】 大曆二年に作者東屯に居を移して、漢西の草堂を親戚にあたる司法吳某にかしあたへしとき手紙がはりにやつた詩。

【詩意】 忠州から小舟に乗つてお客（吳郎）がやつてきたので、自分は騎士をつかはして漢西のほとりに彼をおちつかせた。漢西の古びた草堂を買つたのはあたりの景色がからりとしてゐるためだ、そこをいまはおまへにかして遷りすませて自分は立ちのいて宴遊することをやめてしまつた。だが漢西の宅の堂でながめると高樹の葉のあけぼのにはあたりの雲石もかがやき、風が江上に颯颯と吹きわたるときには秋の帆の亂れるさまもおもしろい。自分はおまへにたのむが、あの堂をわれわれ親戚のものがであふ場所として、たかい軒に坐してたびたびうさばらしをすることを許してはくれまいか。

又呈吳郎 又吳郎に呈す

堂前撲棗任西隣 堂前棗を撲つ西隣に任す、

無食無兒一婦人 食無く兒無き一婦人。 「むべし。」

不爲困窮寧有此 困窮の爲ならずんば寧ぞ此れ有らむや、

祗緣恐懼轉須親 祗だ恐懼するに緣りて轉た須らく親し

卽防遠客雖多事 卽ち遠客を防ぐは多事なりと雖も、

便插疎籬卻任眞 便ち疎籬を插まば卻つて任眞ならむ。

已訴徵求貧到骨 已に訴ふ徵求せられて貧骨に到るを、

正思戎馬淚盈巾 正に戎馬を思へば淚巾に盈つ。

【字解】 【一】卽防二句 舊解諸注皆余が意に滿たす。余は鄰見によりてのぶ。防遠客、遠客とは作者が吳郎をさす、有客乘、何の客なり。防とは吳郎がかくせんとするを作者がさせまじとすること。吳郎は蓋し籬を嚴重にゆひて棗をとらせじとするなり、作者は嚴重にするなといふ、これ防なり。【二】多事 向ふよりみて多事なるなり。餘計なおせつかいといふこと。【三】插疎籬 あらつほいまがきをゆふ。婦人の出入を黙許するためなり。【四】任眞 吾が心（一般の人情）のありのまま。【五】已訴 婦人が訴ふるなり。【六】正思 作者が思ふなり。

【題義】 西隣に貧婦が居て、漢西の宅の棗をとりにくる。吳郎はそれを取らすまいとしたらしい。そのとき作者が緩和策をいひおこつた詩。大曆二年秋、東屯にての作。

【詩意】 漢西の宅の西となりには食物も子供もたないひとりの婦人がゐた。その婦人が自分の堂の

前の棗の實を撲ちおとしにくるが、自分はそれをかつてにさうさせておいたのである。婦人が他人のうちのものを取りにくるといふはよほどの困窮のためでなければどうしてこんなことをするものか、とりにくるとはいへ、おそろおそろやつてゐるところをみるといよいよかはいがつてやりたいきもちがおこるのである。遠來のお客であるあなたがしようとするのをわたしがさしとめようとするはさしでがましく餘計なことではあらうけれども、せひまがきを結ふといふのならせめてごくあらつぽくゆうておかれる様にされたい、それが人情のありのままの姿といふものであらう。あの婦人はこれまですでに上から税金などをせびりとられて骨にしむほどの貧しさになつてゐると訴へてゐるのだ。わたしはこれも兵亂のためだと、兵亂のことをおもつては涙がてふきにいつばいになるのである。

晚晴、吳郎見過北舍

晚晴、吳郎北舍に過ぎらる

圃畦新雨潤、愧子廢鉏來。圃畦新雨潤す、愧づ子が鉏を廢して來るに。

竹杖交頭拄、柴扉掃徑開。竹杖頭を交へて拄ふ、柴扉徑を掃ひて開く。

欲棲羣鳥亂、未去小童催。棲まむと欲して羣鳥亂る、未だ去らず小童催す。

明日重陽酒、相迎自醞醕。明日重陽の酒、相迎ふるに自ら醞醕せむ。

【字解】(一) 北舍 漢西の宅の北舍なりと。然らば吳郎未だ遷り來らざる以前の如し、當時吳郎は一時他處に居りしの中に作者の宅をかりしものか。(二) 廢鉏 地をすくことをやめて。(三) 交頭 よりあひて話すさま。(四) 掃徑 客を迎へるためみちをばききよめる。(五) 未去 吳がかへらうとせぬこと。(六) 小童催 吳蓋し童をつれて來り、童がかへるをうながす。(七) 醞醕 醞は重れて醞すこと、醕はこまぬ酒なりと。これによれば酒をつくりこむことをいふ體なれど、意はさ豫にした酒を酌みてのむことをいふなるべし。

【題義】 晚がた晴れたとき吳郎が宅の北の舍へたづねて來たことをよんだ詩。大曆二年秋、漢西の宅をかしつけぬ以前の作ならんか。

【詩意】 はたけのうねにあたらしいしめりがあつた。(そのせはしいときに)おまへが勤仕事をやめて來てくれたことに對してははぢいる。自分はみちを掃除して柴のとびらを開き、おまへと竹杖をつきながら頭をまじへてはなしこむ。もはや多くの鳥もねぐらにとまらうとみだれて飛ぶ。おまへがかへらぬのでこどもはさいそくをしてゐる。明日は重陽の酒をのむときだから、またお迎へをして郷事にづくりこんである酒を手づからひらいてのませてあげよう。

九日、五首

九日、五首

重陽獨酌盃中酒、重陽獨り酌む盃中の酒、

【字解】(一) 起登 浦往に、五

抱病起登江上臺。病を抱きて起ちて登る江上の臺。

竹葉於人既無分。竹葉人に於て既に分無し、

菊花從此不須開。菊花此れより開くを須ひず。

殊方日落玄猿哭。殊方日落ちて玄猿哭す、

舊國霜前白雁來。舊國霜前に白雁來る。

弟妹蕭條各何在。弟妹蕭條各々何くにか在る、

干戈衰謝兩相催。干戈と衰謝と兩に相催す。

【題義】九月九日陰曆重陽のことをのぶ。此の題五首とありて四首のみあり。趙次公は「登高」の詩を加へて五首とす。或はもと五首なりしを後人「登高」を別にせしものか。大曆二年の作。

【詩意】重陽なのでひとりて盃の酒を酌みかけたが、病氣ながらに起ちあがつて江上の臺にのぼつてみる。竹葉の酒ももはや自分にとつて飲む資格がないとなると、いまよりのちは菊花の花も開かずもよろしい。ここでは日が落ちかかつて黒猿がなきさげび、故郷の空から霜のこのさきに白雁がとんでくる。さびしくも弟や妹はどこにゐるのか、兵亂と老衰とがともにせつせとやつてくるのである。

詩皆飲をやめ獨り登る作なり。獨酌興なきによりて杯をなげうちて起つを想見す。と。明解といふべし。「獨酌」もほとんど口をつけしくらぬのことならん。【一】竹葉。酒の名。【二】於人。人は自己。【三】無分。分は分限、分際、病のため飲む資格なきをいふ。【四】殊方。異方、豐州をさす。【五】舊國。兩京をさす。【六】干戈。吐蕃の入寇をさす。【七】衰謝。老衰をいふ。

〔一〕

舊日重陽日。傳盃不放盃。舊日重陽の日、盃を傳へて盃を放たず。

即今蓬鬢改。但媿菊花開。即今蓬鬢改まる、但だ媿づ菊花の開くに。

北關心長戀。西江首獨迴。北關心長に戀ふ、西江首獨り迴らす。

茱萸賜朝士。難得一枝來。茱萸朝士に賜ふ、得難し一枝の來るを。

〔二〕

【字解】【一】傳盃。盃を甲から乙へとわたす。【二】北關。みやこの宮城の北門。【三】西江。蜀地の大江。【四】茱萸。ケミ。

【詩意】むかしは重陽の日には盃を順わたしにして手から盃をはなしたことはなかつたものだ。それに今やよもぎなすびんの毛もしろくかはり、菊花の花のさくのに對してただはづかしいとおもふばかりである。じぶんの心はいつも北關をこひしたうて君のことをおもひ、この西江にゐてもふりむいて北の方をながめる。けふは朝廷の諸士には「ぐみ」など賜はることであらうが、ここへは一枝なりとくるわけにはゆかぬ。

〔三〕

舊與蘇司業。兼隨鄭廣文。舊蘇司業と、兼ねて隨ふ鄭廣文。

采花香泛泛。坐客醉紛紛。采花香泛泛たり、坐客酔ひて紛紛たり。
 野樹敲還倚。秋砧醒卻聞。野樹敲きて還た倚る、秋砧醒めて卻つて聞く。
 歡娛兩冥漠。西北有孤雲。歡娛兩に冥漠たり、西北に孤雲有り。

【字解】 蘇司業 國子司業蘇源明。【一】 鄭廣文 廣文館博士鄭廣文。蘇鄭が事已にしばしば見ゆ。【二】 采花 つみとりたる菊花。【三】 坐客 自己等をいふ、上の四句は過去をいふ。【四】 野樹二句 これは現在をいふ。【五】 敲還倚 樹がかたむいてゐるのにそれによりかかる。【六】 醒卻聞 この醒の字によりて作者飲を廢してゐることを知るべし。【七】 兩蘇と鄭とをさす。【八】 冥漠 くちがりのところへいつた、死亡せるをいふ。【九】 西北 長安の方位。鄭蘇と歡を極めしは長安時代にあり、故に長安を望む。

【詩意】 自分のもと蘇司業といつしよに鄭廣文にしたがうてのんだものだ。菊の花の香は酒のうへに泛泛とただようてゐるし、坐客は酔うて紛紛とみだれたつた。ところが今日は野らの樹に樹のまがつたままにそれによりかかり、醒めたかほをして砧のおとをよくききわけてゐる。むかしたのしみをしたともだちは二人がふたりともあの世へいつてしまつた。西北のかたみやこの空をながめると、ひとつの根なし雲がさびしく浮かんてゐるだけである。

〔四〕

〔四〕

故里樊川菊。登高素澹源。故里樊川の菊、高きに登る素澹の源。

他時一笑後。今日幾人存。他時一笑の後、今日幾人が存する。
 巫峽蟠江路。終南對國門。巫峽江路蟠まる、終南國門に對す。
 繫舟身萬里。伏枕淚雙痕。繫舟身萬里、伏枕淚雙痕。
 爲客裁烏帽。從兒具綠樽。客の爲に烏帽を裁す、兒の綠樽を具ふるに從す。
 佳辰對羣盜。愁絕更堪論。佳辰羣盜に對す、愁絶更に論するに堪へむや。

【字解】 樊川 一名は後寬川、長安の萬年縣南三十五里にあり。漢の樊噲の采邑なりしにより樊川の名生ず。作者の父閑は奉天の縣令たりしとき此に家す。【一】 素澹 玄澹素澹とて二水の名、玄素は水の黒白の色。澹水は少陵原の北にあたる。【二】 終南山の名、長安の南にあり。【三】 國門 都門をいふ。【四】 雙痕 左右の眼よりおつるあと。【五】 裁烏帽 烏紗の帽をたててかぶる。

【詩意】 ふるさとの樊川の菊。あの花をとつて澹水の源で登高をやつた。あのころ一笑をした以後、いまではそのころの人がいくたりいきのこつてゐるか。この巫峽では江路がうねつてゐる。みやこでは都門に對して終南山の山がそびえてゐる。じぶんは萬里の遠くに舟をつなぎ、病の枕に伏して兩眼から涙の痕をつたはらせてゐる。客のために烏帽はつけぬ帽子をつけ、飲みはせぬがこともらがそなへるといふから酒樽をそなへさせておく。この佳辰にあつてまだ羣盜がやまぬのでじぶんは愁きはまつてともそのほどあひを口にはいひあらはせぬ。

〔五〕登高

〔五〕登高

風急天高猿嘯哀。風急に天高くして猿嘯哀。
 渚清沙白鳥飛迴。渚清く沙白くして鳥飛迴す。
 無邊落木蕭蕭下。無邊の落木蕭蕭として下り、
 不盡長江滾滾來。不盡の長江滾滾として來る。
 萬里悲秋常作客。萬里悲秋常に客と作る、
 百年多病獨登臺。百年多病獨り臺に登る。
 艱難苦恨繁霜鬢。艱難苦だ恨む繁霜の鬢、
 潦倒新亭(停)濁酒杯。潦倒新に亭(停)む濁酒の杯。

【字解】〔一〕嘯哀。哀鳴をいふ。
 〔二〕無邊。定方なきをいふ。八方よりするなり。際涯なき義とするは恐らくは當らず。〔三〕滾滾。止まざる貌。〔四〕繁霜。白きをいふ。〔五〕潦倒。零落不振のさま。〔六〕新亭。亭は停なり。

【詩意】風は急に天は高くして猿がかなしくうそぶいてゐる。渚は清く沙は白くして鳥が飛びめぐつてゐる。木の葉はところさだめずに蕭蕭とおちてくる。長江の水は盡くることなくたえず流れてくる。自分分は萬里の遠きに在つて秋を悲しみながらいつも旅寓の身となつてをり、生涯のうち病みがちでいまひとりで高臺に登つてみる。いろいろの難儀のうちでしらがばかりふえるのは非常に恨めしく、零落

のうちこのごろはからだのぐあひから濁酒の杯を手にすることさへやめてしまつた。

覃山人隱居

覃山人が隱居

南極老人自有星。南極老人自ら星有り、
 北山移文誰勒銘。北山の移文誰か銘を勒する。
 徵君已去獨松菊。徵君已に去りて獨り松菊、
 哀壑無光留戶庭。哀壑光の戶庭に留まる無し。
 予見亂離不得已。予亂離には已むことを得ざるを見る、
 子知出處必須經。子出處の必ず須らく經べきを知らむ。
 高車駟馬帶傾覆。高車駟馬は傾覆を帶ぶ、
 悵望秋天虛翠屏。悵望すれば秋天虚しく翠屏あり。

【字解】〔一〕覃山人。其の人未

だ詳ならず。山人とは處士の稱。
 〔二〕南極老人。星の名、已に見ゆ。以て覃に比す。〔三〕北山移文。北山は建康城(南京)の北にある鍾山、移文は通牒の文、齊の周顒初め仕へず、後ち仕ふ、孔稚圭文を作り山靈の意を傳りて之を讀る。即ち北山移文なり。〔四〕誰勒銘。北山移文に勒す。〔五〕徵君。北山移文に「徵君」は勅移の意、勅は刺すること、移文を石に刺す。ここにては山人の庭に果

して別文ありしや否や不明なるも言を托していへるなり。〔六〕徵君。處士にて官にめされしもの、山人をさす。〔七〕亂離不得已。諸家、亂離にあふこと已むを得ずと解するに似たり。余は「亂離の際には子の出でて仕ふるは已むを得ず」の意ならんと考ふ。〔八〕出處必須經。出仕と退處との是非は躬づから經歷するを要す。〔九〕帶傾覆。傾覆の運命を伴ふをいふ。四皓の探芝歌と稱するものに、

朝馬高蓋、其憂甚夫、とみゆ。【心】 虛翠屏 翠屏は山嵐をいふ、虚は虚設、虚存の意。

【題義】 覃山人が隱居を過ぎて題した詩。この人初め隠れて後ち出仕せしものとみゆ。作者之を惜むなり。製作の時明かならず。

【詩意】 天には自然に南極老人星といふものがある。(あなたは其の星の様であつたのに)一たび出仕したためにだれだか知らぬが庭石に北山移文をほりつけた。微君は已に去つてしまつて庭にはただ松や菊がのこつてをる。あはれげな壑は戸庭にならぬの光輝をものこしてをらぬ。自分はいま亂離の時世だからあなたが出仕したのも已むを得ぬこととはかんがへるが、あなたは自己の出處はその是非いづれにあるやについては自身経験してはじめておわかりになるであらう。高車駟馬などいふものはいつも顛覆を伴うてゐるものである。だから自分はいづれ秋のそらをながめると翠屏の様な山が人待ちがほにいたづらに立つてゐるのをみるのである。

東屯月夜

東屯の月夜

抱病漂萍老、防邊舊穀屯。

病を抱く漂萍の老、邊を防ぐ舊穀の屯。

春農親異俗、歲月在衡門。

春農異俗に親しむ、歲月衡門に在り。

青女霜楓重、黃牛峽水喧。

青女霜楓重く、黃牛峽水喧し。

泥留虎鬪跡、月掛客愁邨。

泥には留む虎鬪の跡、月は掛る客愁の邨。

喬木澄稀影、輕雲倚細根。

喬木に稀影に澄み、輕雲に細根に倚る。

數驚聞雀噪、暫睡想猿蹲。

數驚雀噪を聞く、暫睡猿蹲を想ふ。

日轉東方白、風來北斗昏。

日轉じて東方白し、風來りて北斗昏し。

天寒不成寐、無夢寄歸魂。

天寒くして寐ぬるを成さず、夢の歸魂を寄すべき無し。

【字解】 【一】 漂萍老、うき草のただよふ如く漂泊する老人、自己をさす。【二】 防邊、邊境をふせぐ。【三】 舊穀屯、舊穀とは往年の穀物なり、屯は屯田の地。東屯は後漢の公孫述が開きて穀を積み兵を養ひし處なり。【四】 春農、春は農事の起る節。春の農とは自己をいふ。【五】 異俗、楚地の風俗。【六】 歲月、一歳一月、春より秋にわたるをいふ。【七】 衡門、横木をわたした門。隱者の家の門のさま。【八】 黃牛、峽の名、夷陵に在り。豐州の峽と水相通するによつて用ひしか。【九】 澄稀影、澄は月光のすむこと、稀影は木葉の落ちて影稀となりしこと。【一〇】 倚細根、根は雲根。倚字の主語は月光。句意は倚、輕雲之細根と同じからん。【一一】 數驚、雀の驚の形容語なり。【一二】 暫睡、猿蹲の形容語。

【題義】 東屯の月夜のさまをのぶ、大曆二年秋、東屯にての作。

【詩意】 病をもつて漂泊してゐるこのおやち、今は邊境の亂を防いでゐる往年の屯田の地。春から異俗と親しんで一年にわたつて衡門に住んでをる。青女によつて霜のおいた楓は重くなり、黃牛峽

には水の音がやかましい。泥みちには虎のたたかうたあしあとがあり、月は旅愁をもよほしてゐる村のうへに掛つてゐる。その月の光は葉かげの稀になつた喬木のうへに澄みわたり、軽く浮いた雲のこまかな根もとによりそうて映うてゐる。しばしば驚いて雀がさわぐおとをきき、うづくまつてしばしねてゐる猿のさまなどを想像してみる。いつのまにか日があつて東の方が白み、風が吹いてきて北斗の影はくらくなる。天が寒くてよくねつかれぬため、故郷には歸りたくおもふけれども、魂を托してやるべき夢さへも結ぶことができぬ。

東屯北崦

東屯の北崦

盜賊浮生困。誅求異俗貧。

盜賊に浮生困す、誅求に異俗貧なり。

空邨唯見鳥。落日未逢人。

空邨唯だ鳥を見る、落日未だ人に逢はず。

步壑風吹面。看松露滴身。

壑に歩すれば風面を吹く、松を看れば露身に滴る。

遠山回白首。戰地有黃塵。

遠山に白首を回らす、戰地に黃塵有り。

【字解】

【一】北崦、北にあたる山。【二】浮生、人生、生活。【三】異俗、夔州の俗。【四】戰地、吐蕃の入りし邈州・靈州。

【題義】

東屯の北山にあそびしことをのぶ。大曆二年秋の作。

【詩意】盜賊の已まぬために自分の生計は困苦をし、官吏に税を多く取られるためにこの土地からは貧乏である。自分がここをあるくに村はからつぽで見えるものは鳥ばかりであつて、日が落ちかかるがまだだれにもゆきあはぬ。壑を歩むと風が面を吹きはらふ、松の樹をながめると露がからだのうへにふりかかる。しらがあたまをふりむけてさらに遠山をながめやれば、北方の戰地ではいま黃塵がおこつてゐる。

從驛大草堂復至東屯茅屋二首

驛より草堂に次り、復た東屯の茅屋に至る 二首

峽内歸田客。江邊借馬騎。

峽内歸田の客、江邊馬を借りて騎る。

非尋戴安道。似向習家池。

戴安道を尋ねるに非ず、習家の池に向ふに似たり。

山險風煙僻。天寒橘柚垂。

山險にして風煙僻なり、天寒くして橘柚垂る。

築場看斂積。一學楚人爲。

築場斂積を看る、一に學ぶ楚人の爲。

【字解】

【一】驛、白帝城の驛。【二】草堂、漢西宅の草堂。【三】歸田客、田園に歸る客、東屯をさして田園といふ。客とは自己をいふ。【四】戴安道、晉の戴逵、字は安道。王徽之（子猷）かつて月夜に舟に乗じて山陰に安道を訪ふ。已に見ゆ。【五】習家池、

東屯北崦 從驛大草堂復至東屯茅屋二首

襄陽の習氏の池、晉の山簡が酒を飲みてあそびしところ。已にみゆ。【六】 風煙解 解とは片田舎めきたるをいふ。【七】 築場 農事上の仕事場をきづく。【八】 數積 とりいれ、つみあげ。【九】 楚人爲 楚人は襄州の人、爲は所爲。

【題義】 驛から馬をかりて漢西の草堂にやどり、また東屯へきたことをのべた詩。但し、詩中には次二草堂の事は無く、至東屯の事のみ之あり。大曆二年秋のくれの作か。

【詩意】 峡内だけで家へもどる客である自分は江のほとりで馬をかりて騎つた。王子猷の様に戴安道を尋ねるためではなく、山簡が習家の池に向うたのと似てゐる。山みちは險阻で風煙のさまはるななめき、天は寒くて橘や柚子の實が垂れさがつてゐる。仕事場をこしらへて耕作物のとりいれや積みあげをみる。それはすつかりこの土地の人のするしかたをまなんのである。

〔一〕

〔二〕

短景難高臥。衰年強此身。短景高臥し難し、衰年此の身を強ふ。

山家蒸栗煖。野飯射麋新。山家蒸栗煖かに、野飯射麋新なり。

世路知交薄。門庭畏客頻。世路交りの薄きを知る、門庭客の頻りなるを畏る。

牧童斯在眼。田父實爲隣。牧童斯に眼に在り、田父實に隣を爲す。

【字解】 〔一〕 短景 景は影、日影なり。秋冬は日あし短し。〔二〕 麋 鹿が、肉をいふ。

【詩意】 日が短いので高まくらでねてゐることもならず、老衰ながら此のからだをむりにはたらかす。山中の家では蒸した栗があたたかくてうまう、村野のごはんには射たてのくじかの肉などがあつてめづらしい。世わたりのうへでは人情の交りの輕薄なのを知つてゐるから、じぶんの門庭へお客がやたらにくることははばかつてゐる。じぶんの眼中にあるものはただ牧童であり、となりあひになつてゐるものはじつに百姓おやちにはかならぬ。

暫往白帝復還東屯

暫く白帝に往き、復た東屯に還る

復作歸田去。猶殘穫稻功。復た田に歸り去るを作す、猶ほ殘る穫稻の功。

築場憐穴蟻。拾穗許邨童。築場穴蟻を憐む、拾穗邨童に許す。

落杵光輝白。除芒子粒紅。落杵光輝白く、除芒子粒紅なり。

加餐可扶老。倉廩慰飄蓬。加餐老を扶く可し、倉廩飄蓬を慰む。

【字解】 〔一〕 白帝 白帝城。但し、こは白帝城西なる漢西の宅を指せしなるべし。〔二〕 歸田去 東屯にかへるをいふ。〔三〕 拾穗 こぼれた穂の穂をひろふ。〔四〕 落杵 臼のながへ杵をうちおろす。米舂きするなり。〔五〕 光輝 米粒のひかり。〔六〕 除芒 芒は稲妻の穂先をいふ、こはもみ粒の尖端をいふなるべし。芒を除くは即ちもみを去るなり。〔七〕 子粒 こめつぶ。〔八〕 倉廩 こめぐら。

【題義】 しばらく白帝城の方へいつてゐたがまた東屯の方へかへつたことをよんだ詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 自分はまた田宅の方へかへりゆく、それはまだ稻かりのわざがのこつてゐるからだ。仕事場をきづいては蟻の穴をつぶしてしまふことをきのどくにおもひ、落ちこぼれてゐる穂は村のこどもらにだまつてひろはせてくれてやる。白でつくときねごとに米のひかりが白くなるし、もみのひげをとるとまつかな粒がでる。この米でごはんを多くたべて老いさをたすけてゆくことができる。こめぐらがいっぱいになることをせめてものこととして漂泊生活のこころをなぐさめてゐる。

茅堂檢校收稻二首

茅堂收稻を檢校す 二首

香稻三秋末、平田百頃間。

香稻三秋の末、平田百頃の間。

喜無多屋宇、幸不礙雲山。

喜ふ多屋宇無きことを、幸に雲山に礙げられず。

御袂侵寒氣、嘗新破旅顏。

御袂寒氣侵す、嘗新旅顏を破る。

紅鮮終日有、玉粒未吾慳。

紅鮮終日有り、玉粒未だ吾に慳まず。

【字解】 〔一〕茅堂、東屯の茅堂なり。〔二〕檢校、しらべる。〔三〕百頃、東屯の田の全部の面積。自己の田は其の一部分なり。

【不礙雲山】 地面に平かなる處あるをいふ。〔二〕御袂、おはせを用ふる。寒氣の侵す結果なり。〔三〕破旅顏、旅中のしかめづらなにつこりさせる。〔七〕紅鮮、米粒の色をいふなるべし。或は曰く紅稻種の名と。〔八〕玉粒、うるはしき米つぶ。〔九〕未吾慳、天がなげもなく吾に興へる。

【題義】 東屯の茅堂で稻のとりいれをしらべたことをよんだ詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 香稻が秋の末にみのつた。凡そ平田百頃ばかりの間に於て。このあたりは家が多くなり、雲山につみ場所をふさがれぬことはうれしく幸である。寒氣が侵すからあはせを着、新米をたべてにつこりとする。紅くあざやかな米は一日かかしたことはないし、惜しげもなく自分に玉粒がさづけられた。

〔一〕

〔二〕

稻米炊能白、秋葵煮復新。

稻米炊げば能く白し、秋葵煮れば復た新なり。

誰云滑易飽、老藉軟俱勻。

誰か云ふ滑飽き易しと、老いては軟俱に勻しきに藉る。

種幸房州熟、苗同伊闕春。

種は幸に房州の熟のごとし、苗は同じ伊闕の春。

無勞映渠盃、自有色如銀。

渠盃に映するを勞する無し、自ら色の銀の如くなる有り。

【字解】 〔一〕滑、葵のなめらかなこと。〔二〕軟俱勻、軟は米のやはらかなこと、俱勻とは米粒相共に均しきなり。〔三〕房州熟、房州の熟の如しの意、房州は湖北鄖陽府房縣、蓋し米の産地。〔四〕伊闕、即ち龍門、河南の伊水の岸の崖門、作者の故郷と近し。〔五〕

【詩意】 稲の米は炊ぐに十分に白いし、秋の葵は煮るにとりたてである。葵は滑かていくらでもたべ

て飽くことがたやすくできると誰がいふか。年老いては米粒のやはらかで粒のそろうてゐるおかげを被ることが多いのである。このたびの稲の苗は伊闕の春のうゑつけどきの苗と同じものであつたし、その種の成熟は幸に房州の成熟とおなじであつた。この米粒は車渠のお椀に盛られてそれと相映ふまでもなく、ただでおいてさへはやひとりでに銀の様な色をしてをるのである。

刈稻了詠懷

稲を刈り了りて懷を詠す

稻穫空雲水。川平對石門。

稻穫られて空しく雲水あり、川平かにして石門に對す。

寒風疎草木。旭日散雞豚。

寒風草木疎に、旭日雞豚散す。

野哭初聞戰。樵歌稍出邨。

野哭初めて戰を聞く、樵歌稍く邨より出づ。

無家問消息。作客信乾坤。

家の消息を問ふべき無し、客と作る乾坤に信す。

【字解】 〔一〕石門。崖崖の兩崖をいふ。〔二〕戰。戰在する。〔三〕聞戰。聞戰は野哭の原因なり。仇注に「初聞戰とは哭に因りて知る」ときたるは作者が聞知すとみたるなり。余は從はず。〔四〕出邨。村より起るをいふ。仇注に「稍出邨とは農畢りて始めて樵す」ときたるは樵のため人が村より出發すとみたるが如し。余は從はず。

【題義】 稲を刈りをはつてからおもひをのべた詩。大曆二年秋晩の作ならん。

【詩意】 稲が刈られてしまつてただ雲水がひろく横はつてゐる。川の水は平にながれて石門とむかうてゐる。寒風のために草木の葉はまばらになつてをり、あさ日のさすところに雞や豚がのんきに散らばつてゐる。やつと戦地からのたよりを聞いたとみえて野哭が耳にはひるし、樵人の歌ふうたもすこしづつ村から起るやうになつた。自分は家はあるが消息をたづねるよすががない、これではしかたがない、天地のあひだに旅客としてくらすといふ運命にまかすよりほかはない。

季秋蘇五弟纓、江樓夜宴崔十三評事、韋少府姪、三首

季秋、蘇五弟纓、江樓にて夜宴十三評事、韋少府姪を宴す 三首

峽險江驚急。樓高月迴明。

峽險にして江急なるに驚く、樓高くして月迴に明かなり。

一時今夕會。萬里故鄉情。

一時今夕の會、萬里故郷の情。

星落黃姑渚。秋辭白帝城。

星は落つ黃姑の渚、秋は辭す白帝城。

老人因酒病。堅坐看君傾。

老人酒病に因り、堅坐して君が傾くを見る。

【字解】 〔一〕蘇五弟纓。蘇郎が事蹟明かならず。〔二〕崔十三評事。崔公輔。卷十五にみゆ。〔三〕韋少府姪。作者の姪にして顯

劉琨了詠懷 季秋蘇五弟纓江樓夜宴崔十三評事韋少府姪三首

の謝官たる某。【四】黃姑渚 黃姑は星の名、即ち河鼓、牽牛なりと。【五】老人 自らさす。【六】酒病 酒をのみすぎたやまひ。
【七】懸坐 さちんとすわる。【八】君傾 體をよこにくづす。玉山頽るるの狀。醉意をいふ。

【題義】 秋の季に蘇綬が江邊の樓で崔公輔と章某とをさかもりにまねいたときの詩。大曆二年の作。

【詩意】 峽はけはしくて江水は驚くばかり急である。樓は高くて月光ははるかのかなたまで明るい。こよひめづらしくこれだけ集つた會合で、遠く故郷を思ふ情をよびおこす。夜がふけて黃姑の渚に星は落ち、秋は白帝城から立ち去らうとしてゐる。この時自分は飲みすぎの病氣のために、自分では酒をのむことができません、まじめにさちんとすわりながら君たちが坐をくづして酔ふさまをながめてゐる。

【一】

【二】

對月那無酒登樓況有江。

月に對して那ぞ酒無からむや、樓に登れば況や江有るをや。

聽歌驚白鬢笑舞拓秋臆。

歌を聽きて白鬢に驚き、舞に笑ひて秋臆を拓く。

樽蟻添相續沙鷗竝一雙。

樽蟻添ふること相續ぐ、沙鷗竝ぶこと一雙。

盡憐君醉倒更覺片心降。

盡く憐む君が醉倒するを、更に覺ゆ片心の降るを。

【字解】 【一】笑舞 舞をみて笑ふをいふ。【二】拓秋臆 拓は開くなり。臆を開くは月を容るるためなり。【三】樽蟻 酒をいふ。曹植が七啓に浮蟻鼎沸の語あり、酒の泡を浮蟻といふ。【四】盡憐 憐の意か、憐愛とは一人のこちす憐ふを受する意なるべし。

【五】片心降 片心は自己の一片の心、心降とは安心するをいふ。

【題義】 この篇はもと第三首たり、仇氏移して第二に置く。

【詩意】 月にうちむかうてはどうして酒なしにすまふことができよう、樓にのばればまして江流のながめがあるに於てをやである。自分は歌をききながら鬢の毛の白くなつたことにおどろき、舞をみてうち興じては酒をおしあけてみる。席上では酒はやたらにつぎつぎとまし添へられるし、水上では沙邊のかもめが一對ならんでゐる。自分は酒がのめぬから、すつかり君たちが酔ひつづけるのをよろこんで、それでやつと自分のむねのうちが安心した様なきもちがする。

【三】

【二】

明月生長好浮雲薄漸遮。

明月生ずるは長に好し、浮雲薄くして漸く遮る。

悠悠照遠塞悄悄憶京華。

悠悠遠塞を照らす、悄悄京華を憶ふ。

清動杯中物高隨海上槎。

清は動く杯中の物に、高は隨ふ海上の槎に。

不眠瞻白兔百過落烏鴉。

眠らずして白兔を瞻る、百過烏鴉落つ。

【字解】 【一】生 出現するをいふ。【二】長好 常好なり。【三】遠塞 邊州の城をいふ。【四】清 月光の清。【五】杯中物 酒をいふ、陶淵明が詩句にみゆ。【六】高 月色の高。【七】海上槎 海は江、槎は查、いかたをいふ。自己の驚げる舟をさす。【八】白兔 月をいふ。【九】百過 百回すぐ、夜をふくるさま。【一〇】落烏鴉 烏鴉の低くとぶをいふ。

季秋蘇五弟樓江樓夜宴崔十三評事章少府姪三首

【詩意】 明月めいげつのあらはれでるのはいつもよいものであるが、薄うすいうき雲くもがだんだんさへぎつてじやまをする。この月の光ひかりははるかに遠方とんぱうの塞とちでを照らしてゐるが、自分じぶんはしをたれてみやこのことをおもつてゐる。この月の清光せいこうは杯中はくちゆうの酒さけのうへに動き、この月の高高たんだかと照れることは遠く江上かうじやうのいかだにまでつきしたがつてきてゐる。夜よふけてもねむらずに白兔はくとの影かげをみてゐると、鴉からすが百ひゃくべんもひくく飛びすぎる。

戲寄崔評事表姪蘇五表弟韋大少府諸姪

戲たはせれに崔評事表姪さいひやうじやうてう・蘇五表弟そご・韋大少府諸姪わだせうふしよてうに寄す

隱豹深愁雨。潜龍故起雲。隱豹いんべう深く雨あめを愁うれふ、潜龍せんりゆう故こらに雲くもを起おこす。

泥多仍徑曲。心醉阻賢羣。泥多でたくして仍なほりて徑曲けいきよくあり、心醉しんすい賢羣けんぐんを阻とつ。〔びむや。

忍對待江山麗。還披鮑謝文。江山かうざんの麗れいなるを對たい〔待〕ちて、還またた鮑謝ほうしゃの文ぶんを披ひくに忍しの。

高樓憶疎豁。秋興坐氤氳。高樓かうろう憶おもふに疎豁そくわつなり、秋興しゅうきやう坐まに氤氳いんくんたらむ。

【字解】 〔一〕 崔評事表姪 前篇の崔十三評事なり。崔十三は作者の母方のいとこなれば表弟とあるべきに似たり。(卷十五、三四五頁の崔十三評事公輔の句解をみよ) 暫く疑を存す。〔二〕 蘇五表弟 表弟は母方の年したのいとこ、名は蘇。〔三〕 韋大少府 前篇の韋大少府姪なり。〔四〕 諸姪 この二字は崔・蘇・韋の三人にかけて包括せる語なり。然らば作者の用語にては表姪も表弟も區別なしに之

を姪とよぶものか。或は「諸弟姪」とありし弟を脱したるか。〔五〕 隱豹 「列女傳」に云ふ、陶答子が妻、其の夫を諫めて曰く、南山に支約あり、獨雨七日にして下り食せざるものは、以て其の衣毛に濡して其の文章を成さんと欲すればなり、と。豹を以て暗に自ら比す。〔六〕 徑曲 曲徑の意、こみちのうれりてあること。〔七〕 心醉 先方に深く感服すること。〔八〕 阻賢羣 阻は隔なり、賢羣は羣賢の意、崔蘇韋をさす。〔九〕 忍對 對の字諸本に待に作る、余は待に従ふ。〔一〇〕 江山麗 天のはるるをいふ。〔一一〕 鮑謝 宋の鮑照・謝靈運、崔等が文辭をいふ。〔一二〕 疎豁 かりりとしてゐる。〔一三〕 氤氳 こまやかなるさま。

【題義】 崔公輔・蘇纓・韋某に戲れに寄せて再會をうながした詩。前篇の直後の作。

【詩意】 山にかくれてゐる豹は深く雨を愁へてゐるが、淵にひそんでゐる龍はわざと雲を起して雨をふらした。この雨では泥が多くてそのうへにこみちがまがつてゐる、諸君に心醉しながら諸君の様な賢人たちとへだてられてゐる。雨がはれて江山が麗はしくなるのを待つてからやつと鮑謝の様な文章をひらいてよむなんて氣長なことがどうしてできるものか。きのふ會した高樓はまことにからりとして氣もちがよかつた、あすこでまた會したなら秋の興味はそぞろにこまやかなものがあるであらう。(早くもう一會したまはぬか、の意。)

季秋江邨

季秋の江邨

喬木邨墟古。疎籬野蔓懸。喬木邨墟けうぼくそんきよ古こりたり、疎籬そりに野蔓やまん懸かる。

戲寄崔評事表姪蘇五表弟韋大少府諸姪

季秋江邨

素琴將暇日。白首望霜天。
 素琴暇日に將み、白首霜天を望む。
 登俎黃甘重。支牀錦石圓。
 俎に登りて黃甘重く、牀を支へて錦石圓し。
 遠遊雖寂寞。難見此山川。
 遠遊寂寞たりと雖も、見難し此の山川。

【字解】 一 江都。漢西の村ならん。二 將暇日。將の字、韻注に「詩」を引きて送と調ぜり。將の字は暇日を支配せずして素琴を支配する動詞とみるべし。「ひきあるし」の義。ひきあるとはそれをもつて手すさびとするなり。三 黃甘。甘は柑。四 支牀。牀をささへる。五 錦石。錦紋あるうつくしき石。

【題義】 漢西の江ぞひの村の秋の季のさまをのべた詩。大曆二年の作。

【詩意】 たかい樹がたちならんで村のくづれがきの様子などがふるめかしく、自分のあらくゆうたまがきには野生のつるぐさなどがぶらさがつてゐる。じぶんはひまなをりには飾りのない琴をてすさびとし、時としては白髪くびをあげて霜おく天をながめたりする。じぶんの椅子の脚は錦紋のある圓い石で支へてあるし、そのまへには俎にのせてどつしりとみのつた黃い蜜柑などをもちだす。みやこをはなれてこんな遠方に飄遊してゐるのはさびしくはあるが、ここの様ないい山川もめつたにはみられぬ。

小園

小園

由來巫峽水。本是楚人家。
 由來巫峽の水、本是楚人の家。
 客病留因藥。春深買爲花。
 客病留まるは藥に因る、春深買ひしは花の爲めなり。
 秋庭風落果。瀼岸雨頽沙。
 秋庭風果を落す、瀼岸雨沙を頽す。
 問俗營寒事。將詩待物華。
 俗に問ひて寒事を營む、詩を將て物華を待つ。

【字解】 一 小園。漢西の宅の小園。二 留。買。園に留まり、園を買ひしなふ。三 瀼岸。大瀼水の岸。四 寒事。各なすべき仕事、種藝の事をさす。五 將詩。詩をてすさびとする。六 物華。花草・藥草の春さかえること。

【題義】 小さな園のことをよんだ詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 巫峽の水の流るところは由來これ楚人の家居するところである。自分は旅で病んでこの園にとどまつてゐるのは藥草を植うる便があるためであり、この春この園を買うたのは花をつくつたのしめるからであつた。今や秋の庭には風が果物を吹きおとし、瀼水の岸では雨が沙をうちくづす。このとき自分は土俗に問うて園藝に關する冬の仕事をいとなみ、詩をてすさびとしながら來年の春の植ゑ込みのさかえるときを待たうとおもつてゐる。

寒雨朝行視園樹 寒雨、朝に行きて園樹を視る

柴門擁_(三)雜_(三)樹向_(三)千株。柴門の擁_(三)雜_(三)樹千株に向んとす、
 丹橘黃甘此地無。丹橘黃甘此の地には無し。
 江上今朝寒雨歇。江上今朝寒雨歇む、
 籬中秀色畫屏舒。籬中の秀色畫屏舒ふ。
 桃蹊李徑年雖古。桃蹊李徑年古りたりと雖も、
 梔子紅椒艷復殊。梔子紅椒艷復た殊なり。
 鏤石藤梢元自落。石を鏤す藤梢は元自ら落つ、
 倚天松骨見來枯。天に倚る松骨見來枯る。
 林香出實垂將盡。林香しく出實垂れて將に盡きむとす、
 葉蒂辭枝不重蘇。葉蒂枝を辭して重ねて蘇へらす。
 愛日恩光借貸。愛日恩光借貸を蒙るも、
 清霜殺氣得憂虞。清霜殺氣憂虞を得。」

【字解】【一】寒雨。秋晚以後の雨はみな寒雨なり。【二】園樹。園は漢西の宅の果園。【三】擁樹。擁はかかへこんでゐること。一に擁に作る、今體に従ふ。雜樹は雜木、果樹及び他樹をこめていふ。【四】此。地無。此の地の他處には無きないふ、此地とは夔州をさす。【五】此。北に作る、北地ならば北支那をさす。【六】畫屏舒。雜樹の葉實の色彩を畫屏をもつてたとへたり。【七】桃蹊。桃李の林下のこみち。【八】梔子。くちなし、秋、黃實あり。【九】紅椒。山椒の赤き實。【一〇】殊。特別にうるはしきないふ。【一一】鏤。石を封じこめてからみつく。【一二】元自落。ひとりてに上から下方へだらりとさがる。【一三】倚天。

衰顔動_(三)覓_(三)藜_(三)牀_(三)坐。衰顔動もすれば藜牀を覓めて坐す、

緩步仍_(三)須_(三)竹_(三)杖_(三)扶。緩歩仍は須つ竹杖の扶。

散騎未_(三)知_(三)雲_(三)閣_(三)處。散騎未だ知らず雲閣の處、

啼猿僻_(三)在_(三)楚_(三)山_(三)隅_(三)。啼猿僻在す楚山の隅。」

これは藜性の果實のなりふしをいふならん。【一】愛日。冬の日光をいふ。左傳に「冬日可愛」とみゆ。愛日二句は畫し全樹木にかかる。浦氏は柑橘のみにかかるとす。【二】恩光借貸。「恩光の借貸を蒙るも」の意。【三】殺氣。「禮記」月令に「仲秋之月、殺氣浸盛」とみゆ、秋の半には草木などを殺す氣がさかになる。【四】憂虞。得_(三)不_(三)憂虞_(三)の意なるべし。【五】藜牀。あかざの意を張つたいす。【六】散騎。一句。晉の潘岳が故事。岳が秋興賦序に、以_(三)太尉_(三)、當直_(三)於散騎之省、高閣連_(三)雲、陽景_(三)照_(三)曜、とあり。作者尙書の郎官たるを以て岳の散騎の省に在るに比す。【七】雲閣。雲に連る高き閣、上にみゆ。以て尙書の省に比す。

【題義】寒天の雨のときに、あさあるいて果園の樹木をみめぐつた詩。大曆二年冬の作か。

【詩意】我が柴門の内の雜木はかれこれ千本もあるが、そのうちの丹橘黃柑は此の土地でこの園よりほかには無い。けさは江上の寒雨がやんで、籬の中の葉實のさえた色あひはまるで畫いた屏風をひろげた様である。桃李のこみちは年をへてふるめかしいが、くちなしだの山椒のあかい實だののつややかさはまた格別にうつくしい。藤蔓は落ちかかる石を封じこめてその梢は自然とたれさがつてゐるし、天に倚るほど高くそびえた松の樹の骨はいまでは枯れた様になつてゐる。林中一體にかをりがし

て柑橋の實はその姿もあらはに垂れさがつてなくならうとしてゐる、樹の葉や蔓の蒂は枝から離れてふたたびよみがへるさまもない。園中の樹がこんなだから、たとへ冬の愛すべき日光がなさをかけてくれている、清霜や殺氣で攻めたてられてはこれらの樹の運命はしんばいせぬわけにゆかぬ。』じぶんは老衰したかほつきでもすると藜牀をもとめてすわる。もちろんゆつくりあるくときでも竹の杖に扶けてもらふ必要がある。散騎の官にも比すべきこの自分はじぶんの役所の雲閣がどこにあるやらさへ知らず、いたづらにかたよつた楚山のすみで猿のなくのをきくばかりである。』

傷秋

傷秋

邨僻來人少。山長去鳥微。

邨僻にして來人少く、山長くして去鳥微なり。

高秋收畫扇。久客掩柴扉。

高秋畫扇を收む、久客柴扉を掩ふ。

懶慢頭時櫛。艱難帶減圍。

懶慢頭時に櫛けづる、艱難帶圍を減す。

將軍思汗馬。天子尙戎衣。

將軍汗馬を思ふ、天子尙ほ戎衣。

白蔣風颼脆。殷檉曉夜稀。

白蔣風颼に脆し、殷檉曉夜稀なり。

何年滅豺虎。似有故園歸。

何の年か豺虎を滅し、故園の歸有るに似む。

【字解】(一) 收畫扇。ふうちばをかたづけける、暑氣去れるによる。(二) 掩柴扉。人と塵接を避くるによる。(三) 懶慢。ものうさ、なほざり。(四) 艱難。身世のなんざ。(五) 帶減圍。身體瘦せて腰圍を減するなり。(六) 思汗馬。馬に汗せしめてはたらかんとおもふ、大曆二年九月、吐蕃の鄯州軍州に入りしときのことなす。(七) 白蔣。まこも米。(八) 脆。折れやすきなふ。(九) 殷。殷は赤黒色、檉は「かはやなぎ」、檉は皮赤如し、枝葉如し、一名雨雨、と陳瓊が草木統にみゆ。

【題義】秋をいたんだ詩。大曆二年秋の作ならん。

【詩意】村がかたよつてゐるので來る人はすくなく、山が長くつづいて飛び去る鳥のかけが微かである。秋になつたからうちばをとりかたづけ、なが逗留の旅客として柴の扉をとざしてゐる。ものうさでなほざりだから頭は時あつてかとかすぐらゐること、いろいろの難儀を経たために瘦せて帯がだるむ様になつた。このとき北方では兵亂があつて將軍は馬に汗をかかせてひととはたきせんとおもひ、天子はいまだに戎衣をつけておいでになる。ここでは白蔣がもろくも回風に吹き折られ、かはやなぎの赤ぐろい葉が日夜まれになつてゆく。いつになつたら豺虎の様な盜賊をほろぼしつくして、ふるさとへかへれる見込みがあるらしくなれるのであらう。

即事

即事

天畔羣山孤草亭。

天畔の羣山に草亭孤なり、

【字解】(一) 草亭。濠西の宅の

江中風浪雨冥冥。
一雙白魚不受釣。
三寸黃甘猶自青。
多病馬卿無日起。
窮途阮籍幾時醒。
未聞細柳散金甲。
腸斷秦川流濁涇。

江中の風浪に雨冥冥。
一雙の白魚釣を受けず。
三寸の黄甘猶は自ら青し。
多病の馬卿起つに日無し。
窮途の阮籍幾時か醒めむ。
未だ聞かず細柳金甲を散するを。
腸は断ゆ秦川濁涇流るるに。

草堂。【一】馬卿。司馬長卿、長卿は相如が字。【二】阮籍。已にみ酔。【三】幾時醒。阮籍はかつて一醉六十日さめず。【四】細柳。已にみ酔。地名、漢の周亞夫が陣せし處、長安の近地をあぐ。【五】秦川。長安をいふ。【六】濁涇。涇は水の名、其の水濁る。水の濁るは暗に吐蕃の亂を意味す。

【題義】をりにふれてよんだ詩。大曆二年秋の作ならん。

【詩意】天のはてのむら山のなかに草亭がぼつちりと存在してゐる。江の中には風浪が起つてそのうへに雨がぐらくふりしきつてゐる。釣糸を垂れても一對の白魚がかかつてはくれぬし、徑三寸ほどの黄柑はまだ青くてくへぬ。司馬相如に比すべき多病の自分はいつ起ちあがれるのか、阮籍に比すべき自分はゆきつまつた途に在つていつ醉からさめるのか。都の細柳の營で金甲の兵を散じていくさをなはつたといふことを自分はまだ聞かぬ、秦川の地方に涇水の濁水が流れてやまぬことをおもふと腸が

ちぢられる様である。

耳聾

耳聾

生年鵬冠子。歎世鹿皮翁。
眼復幾時暗。耳従前月聾。
猿鳴秋淚缺。雀噪晚愁空。
黃落驚山樹。呼兒問朔風。

生年鵬冠子、歎世の鹿皮翁。
眼は復た幾時か暗からむ、耳は前月より聾す。
猿鳴くも秋涙缺けたり、雀噪くも晚愁空し。
黄落山樹に驚き、兒を呼びて朔風を問ふ。

【字解】【一】生年。解する者曰く、生年は猶ほ生平のごときなりと。然れども生平を生年といふことを聞かず、年の字或は平の誤ならんか。【二】鵬冠子。戰國時の隱者、馮諼之を師とす、深山の中に居り鵬を冠となし、書を著はして道家の事をいふと。鵬は勇雄なり、其の羽を以て冠となす。【三】鹿皮翁。これ亦隱者なり。卷七(三八頁)の句解をみよ。

【題義】耳のつんばになりしことをよんだ詩。大曆二年秋晩の作なるべし。かりに九月の作とすれば作者は八月頃より耳遠くなりしなり。

【詩意】自分は平生鵬冠子の様な男であり、また世事を歎息してゐる鹿皮翁の様なものである。眼はいつ暗くなるか知れぬが、耳は前月からつんばになつてしまつた。猿が鳴いてもこれまでは悲しくて

泣いたが今は秋の涙を流すこともなくなつたし、雀ががやがやさわいでもこれまでは夕がたうれひを
もよほしたがいまはそれもなくなつてしまつた。みれば山の樹の葉が黄ばんで落ちる。これはと驚い
てこどもを呼んでいま北風が吹いたかどうかとたづねてみる。こんな耳になつてしまつた。

獨坐二首

獨坐二首

竟日雨冥冥。雙崖洗更青。

竟日雨冥冥たり、雙崖洗はれて更に青し。

水花寒落岸。山鳥暮過庭。

水花寒くして岸より落ち、山鳥暮に庭を過ぐ。

煖老思燕玉。充饑憶楚萍。

煖老燕玉を思ひ、充饑楚萍を憶ふ。

胡笳在樓上。哀怨不堪聽。

胡笳樓上に在り、哀怨聽くに堪へず。

【字解】 〔一〕雙崖 重唐の兩岸の崖。〔二〕水花 水上に散りたる花。〔三〕煖老 老體をあたためる。〔四〕燕玉 燕地の玉
類の美人。古詩に云ふ、燕趙多佳人、美者顏如玉、と。趙注に曰く、即ち孟子に謂はゆる「七十、人に非ざれば煖ならず」の意な
り。〔五〕楚萍 巴にみゆ。「孔子家語」に楚王が萍實を得し話。〔六〕樓上 城樓のうへ。

【題義】 獨り坐せしときのころをよんだ詩。大曆二年秋の作なるべし。黃鶴は東屯にての作とせる
が、東屯が瀘西かは不明。

【詩意】 日いつばい雨がくらくふりしきつて、瞿唐の兩崖は洗はれて一層青くなつた。花は寒げに岸
から落ちて水上に浮び、山の鳥は夕ぐれに庭へやつてくる。老體をあたためるには燕地の美人でもあ
つたらとかがへ、饑腹に充てるためには楚の萍實でもあつたらとおもふ。このとき城樓のうへには
胡笳のこゑがして、哀怨きくにたへぬほどである。

〔一〕

〔二〕

白狗斜臨北。黃牛更在東。

白狗斜に北に臨む、黃牛更に東に在り。

峽雲常照夜。江日會兼風。

峽雲常に夜を照らす、江日會す風を兼ぬ。

麗藥安垂老。應門試小童。

麗藥垂老に安んず、應門小童を試む。

亦知行不逮。苦恨耳多聾。

亦た知る行の逮ばざるを、苦た恨む耳聾多きを。

【字解】 〔一〕白狗 峽の名、歸州にあり。〔二〕黃牛 峽の名、宜昌に在り、歸州よりは東、卷十(四〇二頁)句解をみよ。〔三〕
應門 門で、こたへる、來客のとりつぎをするなり。〔四〕試 童の能否を試むるなり。〔五〕行不逮 卷十九の「秋日夔府詠懷」詩に
も見ゆ。行歩他人に及ばずの義なり、脚力のよくなりしをいふ。

【詩意】 白狗峽はここからはすかひに北に臨んでをるし、黃牛峽は更に東の方にある。この峽中での
雲はあかくていつも夜色を照らし、江上に太陽のさすときはきつと風をともなうてくる。自分は藥草

を日光にさらしたりなどして老衰の境に安んじてをり、こどもに門口の應對をさせてその才能ぶりをためしてみたりする。じぶんの足つきが他人に及ばぬことはわかつてゐるが、耳がつんばでなんにもきこえぬといふことはすゝぬ恨めしいことである。

雲

龍以瞿唐會。江依白帝深。

龍には瞿唐を以て會す、江には白帝に依りて深し。

終年常起峽。每夜必通林。

終年常に峽より起る、毎夜必ず林に通ず。

收穫辭霜渚。分明在夕岑。

收穫するるとき霜渚を辭し、分明夕岑に在り。

高齋非一處。秀氣豁煩襟。

高齋一處に非ず、秀氣煩襟豁なり。

雲

【字解】(一) 以瞿唐 瞿唐の峽によりての意。(二) 會 雲が龍と會するをいふ。(三) 深 雲の深く横はるをいふ。江水の深きをいふに非ず。江の字主語によむべからず。(四) 起峽 雲が峽より起る。(五) 通林 雲が林をすざる。前篇の峽雲常照夜の意。(六) 收穫 收穫のときをいふ。(七) 辭霜渚 雲が辭去するなり、霜渚は霜おこなぎさ。(八) 夕岑 岑は山の小にして高きもの。(九) 高齋非一處 陸游が記にいふ、少陵、夔に居り三たび居を徙す、皆高齋と名づく、其の詩に「次水門」といふものは白帝城の高齋なり、「依藥餌」といふものは瀘西の高齋なり、「見一川」といふものは東屯の高齋なり、故に又曰く、高齋非一處と。この句はひろくいひて東屯の高齋を主とせしなり。(一〇) 秀氣 雲氣の秀發せるさまをいふ。(一一) 煩襟 襟の煩悶、こせこせとうるさきさまをいふ。

るげて大きくひろくさせる。

【題義】雲のことをよんだ詩。黃鶴は大曆二年東屯にての作とせり。

【詩意】(雲は)龍とは瞿唐峽によりて會合し、江には白帝城に依つて深くよこたはつてゐる。(雲は)年ちういつも峽間からおこり、夜ごとに必ず林中を通過する。(雲は)收穫ときには霜おく渚を辭し去つて、はつきりと夕ぐれのみねのうへにかかつてゐる。自分の高齋は一箇所ではないがどこでもこの雲の秀氣があつてうるさきむねのうちを寛豁にしてくれる。

大曆二年九月三十日

大曆二年九月三十日

爲客無時了。悲秋向夕終。

客と爲りて了る時無し、悲秋夕に向ひて終る。

瘴餘夔子國。霜薄楚王宮。

瘴は餘る夔子の國、霜は薄し楚王の宮。

草敵虛嵐翠。花禁冷葉紅。

草は敵す虚嵐の翠に、花は禁る冷葉の紅に。

年年小搖落。不與故園同。

年年小しく搖落す、故園と同じからず。

【字解】(一) 九月三十日 秋の盡くる日なり。(二) 瘴 あしき水蒸氣。(三) 夔子國 夔州をさす。(四) 楚王宮 巴にみゆ。(五) 草敵 草の碧色に敵す。(六) 虚嵐 谷間の山氣。(七) 花禁 花の紅色相當る、禁は富なり。(八) 冷葉 秋葉、霜葉をいふ。

もみぢせる葉をいふ。【七】 小橋落 木の葉のゆられおつることすくなし。【三】 故園 兩京をさす。

【題義】 大曆二年九月三十日、秋の盡きんとする日によんだ詩。

【詩意】 旅人たる境涯ははてしもないが、秋を悲しむのもこよひかぎりて終らうとする。蘓子の國であつたこの土地ではまだ瘴氣がのこつてをるし、楚王の宮のあたりも霜がうすい。(こんなに暖かいから) 草の碧色は谷中の嵐氣の翠にも匹敵し、花の色はもみぢの葉の紅に當り得るほどである。まいねんここでは木の葉のゆられおちることもほんのすこしであつて、秋の様子がふるさととは同じくない。

十月一日

十月一日

有瘴非全歇。爲冬亦不難。瘴有り全く歇めるに非ず、冬を爲す亦た難からず。

夜郎溪日暖。白帝峽風寒。夜郎溪日暖かに、白帝峽風寒し。

蒸裏如千室。焦糖幸一椀。蒸裏千室の如し、焦糖幸に一椀。

茲辰南國重。舊俗自相歡。茲の辰南國重んず、舊俗自ら相歡ぶ。

【字解】 【一】 亦不難 仇注に、このまゝにて二解ありとて怪歎の詞、欣幸の詞とする二説をあぐ。是に非ず、怪歎の詞ならば不亦難に作り、不亦難 手の意とみるべし。亦不難にては當然欣幸の詞なり。【二】 夜郎 地名、今の貴州遵義府桐梓縣東。【三】 溪日 漢日。

漢は五溪、湖南辰州にあり、卷十七(六四四頁)の句解をみよ。或は曰く、夜郎漢は漢名にして健爲に在りと。余案するに夜郎五溪は大體の南土をいひしならんのみ。【一】 蒸裏 ちまきの類なり。「齊民要術」によれば、秣米・生薑・楨皮・胡芹・小蒜・鹽等を煮、こまかに切りまぜて蒸り、彼の葉に香油をぬり、方七寸くらゐの大きにして十字に蒸むものなりと。蒸裏とあればこれはむしたるものならん。【二】 如千室 戸戸みな然るが如くなるをいふ。【三】 焦糖 かけた餡をいふ。【七】 一椀 椀は盤に同じ大きなひら皿。【八】 茲辰 十月一日をさす。

【題義】 十月一日の立冬のことをのべた詩。大曆二年の作。

【詩意】 瘴氣はまだ有つて全くやんでしまつたのではない、だから冬をすこすのもむつかしくはない。夜郎からかけて五溪あたりを照らしてくる太陽は暖かで、白帝城のあたりすこしく峽中の風が寒いくらゐることである。けふはどこの家もちまきを作りて贈りあふ様だが、自分も幸に一盤の焦糖をもらつた。けふの節は南方の土地では大切にすする日であつて舊風俗として彼等はしせんおたがひにうれしがつてたのしんでゐる。

孟冬

孟冬

殊俗還多事。方冬變所爲。殊俗還た多事なり、方に冬にして爲す所を變ず。

破甘霜落爪。嘗稻雪翻匙。甘を破れば霜爪に落つ、稻を嘗むれば雪匙に翻へる。

十月一日 孟冬

三八一

巫峽寒都薄。黔溪瘴遠隨。巫峽寒都薄。黔溪瘴遠隨。終然減灘瀨。暫喜息蛟螭。

【字解】 〔一〕 破甘。甘は柑。〔二〕 霜落爪。霜は實物、蓋し霜を帯びたる柑をとりしなり。〔三〕 雪。飯米の白色をたとへていふ。〔四〕 黔溪。黔州の諸溪、黔州は西陽州の彭水縣、夔州の西南にあたり。〔五〕 終然。つひに。〔六〕 灘瀨。灘や瀨の水をいふ。〔七〕 息。休息して威を収むるをいふ。

【題義】 孟冬十月のことをのべた詩。大曆二年の作。

【詩意】 ちがつた風俗のところではいろいろのことがある、冬になつても北とはすることがあふ。すなはち蜜柑を破れば霜が爪に落ちかかるし、霜をたれば雪が匙のさきに巻き起される。巫峽では寒氣すべて薄く、黔溪の方から暖かい瘴氣が遠くこちらへついでくる。けつきよくは灘瀨の水がへるので、しばらく蛟螭が威力をふるはぬことをうれしくおもふ。

雷

雷

巫峽中宵動。滄江十月雷。巫峽中宵動。滄江十月雷。龍蛇不成蟄。天地劃爭迴。龍蛇不成蟄。天地劃爭迴。

卻碾空山過。深蟠絕壁來。卻碾空山過。深蟠絕壁來。何須妬雲雨。霹靂楚王臺。何須妬雲雨。霹靂楚王臺。

【字解】 〔一〕 動。雷聲のうごきをいふ。〔二〕 不成蟄。龍蛇は冬は穴にもぐるものなるに地暖きゆふ穴ごもりせず。〔三〕 天地。二字副詞なり。天地の間に於ての義。〔四〕 劃爭迴。劃とは蓋し電光の線がくぎりをつけるさまをいへるならん。邵注には恍惚雷聲の響とせり。爭迴とは雷聲が争ひめぐらるなり。〔五〕 碾空山。雷聲を承けていふ、碾は碾なり、碾なり。きしること。〔六〕 蟠絕壁。龍蛇を承けていふ。〔七〕 妬雲雨。巫山神女のご事、已にみゆ。〔八〕 霹靂。はたたかみなり、雷聲のひびくをいふ。〔九〕 楚王臺。雲臺のこと。已にみゆ。

【題義】 雷をきいたことをよんだ詩。大曆二年十月の作。

【詩意】 大江から起つた十月の雷が、よなかごろ巫峽にとどろいた。龍蛇がまだ穴ごもりをせず、かく雷が天地の間に電光を引いて争うてかけめぐつてゐるのだ。それで雷はさびしい山にきしりながら過ぎ、龍蛇は絶壁のおくにふかくわだかまるのである。まさか神女の雲雨を妬む必要もあるまいに、ねたましいものか楚王の陽臺のあたりにはためくおとがしてゐる。

悶

悶

瘴癘浮三蜀。風雲暗百蠻。瘴癘浮三蜀。風雲暗百蠻。

卷簾唯白水。隱几亦青山。
 猿捷長難見。鷗輕故不還。
 無錢從滯客。有鏡巧催顏。

【字解】「一」猿。惡氣。「二」三蜀。漢の時、蜀郡の外に廣漢・雋爲の二郡を置く、因つて三蜀といふ。「三」從滯客。滯客とは自己をさす、滯客の無錢にまかすの意。「四」巧催顏。催顏とは衰頰を催すをいふ。鏡が催すわけに非ざれども、鏡をみることに老衰するゆゑ、鏡がさせるかの如くにいひなせるなり。

【題義】心のもだえについてよんだ詩。大曆二年の作ならんか。

【詩意】瘴癘の惡氣が全蜀に浮び、風雲の氣が百蠻の地方へかけて暗くなつてゐる。簾を巻くとき見ゆるものは白い水ばかり、胸息によつてながめるときは亦唯だ青い山が見えるばかりである。猿はすばしくていつもみとめにくいし、鷗は身がるに泛んでゆきわざともどつてこぬ。長くとどまつてゐる旅人（自己をいふ）の貧しくて錢がないのはそれもそのまま勝手にするがよい。鏡をみれば鏡はうまくこちらの顔つきに老衰をもよほさせてくれるだけのことだ。

夜二首

夜二首

向夜月休弦。燈花半委眠。
 夜に向ひて月弦を休す、燈花半ば委するとき眠る。

號山無定鹿。落樹有驚蟬。

山に號ぶは定鹿無く、樹より落つるは驚蟬有り。

暫憶江東鱸。兼懷雪下船。

暫く憶ふ江東の鱸、兼ねて懷ふ雪下の船。

蠻歌犯星起。空覺在天邊。

蠻歌星を犯して起る、空しく覺ゆ天邊に在ることを。

【字解】「一」向夜。向の字もと白に作る、仇氏、海鹽劉氏に従ひて向に從ふ、今之に依る。白に從ふ者は曰く、白夜とは佛家にて前半月をいふ語なりと。「二」月休弦。弦月の没するをいふ。「三」燈花。ともしびのほこぼこすること。「四」半委眠。半委は燈花が半ばおつること、眠は作者がねむるなり。「五」江東鱸。晉の張翰が故事、已にみゆ。「六」雪下船。晉の王子猷が雪夜に船にて蕪湖（安道）をたづねし故事、已にみゆ。「七」犯星。曉星を犯す。「八」天邊。天涯の意。

【題義】夜の景情をのべた詩。大曆二年秋の作なるべし。

【詩意】夜がふけるままに弦月は没してしまひ、燈の花が半ば落ちてしまふころに自分はやつと眠る。どの鹿ときまもなく鹿は山にさけんでゐるし、びつくりして樹から落ちて鳴く蟬もある。しばし張翰が江東の鱸魚の鱠をおもうて故郷へかへつたことをかながへたり、また王子猷が山陰に雪夜の船をかべたことなどをおもうてみる。そのうちにあげがたが近づいて蠻人どもの歌が星のあかりのあるうちから起りだす。之をきくといたづらに身は天涯の遠くにゐるのであるといふことを感ずるのである。

[11]

[11]

城郭悲笳暮。邨墟過翼稀。
 甲兵年數久。賦斂夜深歸。
 暗樹依巖落。明河繞塞微。
 斗斜人更望。月細鵲休飛。

【字解】(一) 過翼 通過する鳥。(二) 賦斂 税金をわりつけ、とりいれる、こゝは納税する人ないふ。(三) 暗樹 樹は樹葉をいふ。(四) 明河 あまのがは。(五) 塞 豊州の城塞をいふ。(六) 斗 北斗、長安の在る方位。(七) 鵲休飛 くらさゆふなり。

【詩意】城郭は悲笳のこゑのうちに暮れて、村墟にはとほりすぎる鳥の翼もまれになつた。いくさ
 が起つてから年數は久しく、納税する人人が夜がふけてから歸つてゆく。巖によりそつて立つてゐる
 くらがりの樹から落ち葉がさらさらと鳴り、城のとりにをとりかこんでみたあまのがはらも微になつ
 てゆく。北斗はやや傾きかけたが自分は更にそれをながめてゐるし、月影は細く弱いので鵲も飛は
 なくなつてしまつた。

朝二首

清旭楚宮南。霜空萬嶺含。

清旭楚宮の南。霜空萬嶺を含む。

朝二首

野人時獨往。雲木曉相參。

野人時に獨往す、雲木曉に相參はる。

俊鶴無聲過。饑鳥下食貪。

俊鶴聲無くして過ぐ、饑鳥下り食すること貪なり。

病身終不動。搖落任江潭。

病身終に動かさず、搖落江潭に任す。

【字解】(一) 清旭 すつきりとしたあさひ。(二) 楚宮 楚王の宮、巳にみゆ。(三) 霜空 霜をおびたそら、秋天をいふ。(四) 野人 自己をいふ。(五) 參 兼なり。(六) 俊鶴 すぐれたたか。(七) 不動 映を田ですして居止するをいふ。(八) 搖落任江潭 任江潭之搖落の意、江潭は江のふちのほとりをいふ、要をさす。

【題義】朝の景情をのべた詩。大曆二年の作ならんか。

【詩意】すつきりとしたあさひの光が楚王の宮の南にさし、霜氣をおびた空が無數の嶺をつつんでゐる。このとき田野の人たる自分はひとりであらりとでかけてみると、曉にあたつて雲や樹木が錯雜して見える。饑えた鳥がひくいとこへおりて貪慾げに餌食をあさつてゐると、そのうへをするどい鶴がこゑもたてずにとほつてゆく。こんな様子をながめるのみで結局この病體はこの土地から動きださずにあるのである。この江邊の地に搖落の時節がこようとそれはさうさせておくより仕方がない。

〔一〕

浦帆晨初發。郊扉冷未開。

浦帆晨に初めて發す、郊扉冷にして未だ開かず。

〔二〕

林疎黃葉墜、野靜白鷗來。
林疎にして黄葉墜つ、野靜にして白鷗來る。
 礎潤休全濕、雲晴欲半迴。
礎潤ひて全く濕ふことを休む、雲晴れて半ば廻らむと欲す。
 巫山終可怪、昨夜有奔雷。
巫山終に怪しむ可し、昨夜奔雷有り。

【字解】 浦帆 浦上の帆なり、帆は舟の義なり。朱熹、韓愈が寄李大夫詩の無因帆、江水の帆字に注するときは杜甫の此の句を引きて帆字を去聲によみ音泛とせり。朱鶴齡が注之を引き、仇氏亦之に依れり。然れども余案するに帆の字動詞として用ふる時は音泛ならんも名詞として用ふる時は平聲にして音ハンなり、此の時、「浦帆」を以て「郊扉」に對したるは帆の名詞として用ひしものなり。朱子に従つて去聲音ヘンとよむべき理由を見出す能はず。故に余は字の如く讀む。【二】 郊扉 郊居のとびら、自己の門扉をさす。【三】 冷 秋冷をいふ。【四】 礎潤 柱のどだい石がうるほふ。【五】 休全濕 すつかりしめるといふことはなくなつた。すこしかわいたところが出来たこと。秋になりしゆみすがに水蒸氣が減じたるなり。【六】 半迴 廻は回去の意。これも雲の少くならんとするをいへり。【七】 奔雷 「雷」の詩にありしごとく巫山あたりは十月にも雷あるなり。

【詩意】 浦上の帆かけ舟はあさはやく先づ出ていつたが、自分の郊外の宅の門扉は秋の冷さにまだあけずにある。黄ばんだ木の葉が墜ちて林はまばらになつた、野らのすがたは靜で白いかもめがやつてくる。柱のいしすゑはしめりはあるにはあるがすつかりしめるといふことはなくなつたし、雲も晴れわたつて半分はその發生地へかへりかけてゐる、ただここにあくまで不思議におもはれるのは巫山あたりでゆうべは雷がなりわたつたことだ。

戲作俳諧體遺悶二首

戲れに俳諧體を作り悶を遣る 二首

異俗吁可怪、斯人難竝居。
異俗吁怪しむ可し、斯の人竝び居り難し。
 家家養烏鬼、頓頓食黃魚。
家家烏鬼を養ひ、頓頓黃魚を食ふ。
 舊識能爲態、新知已暗疎。
舊識能く態を爲す、新知已に暗に疎なり。
 治生且耕鑿、只有不關渠。
治生且つ耕鑿せむ、只だ渠に關せざる有るのみ。

【字解】 一 俳諧體 俳優談諧の如くなるをいふ。おどけたさまの詩。【二】 竝居 竝立して居住する。【三】 養烏鬼 烏鬼とは鳥のこと、神鳥の類、鳥を靈物として取扱ふによりて之を鬼といふ。鳥といふ鬼の義なり。養は養育なり。唐の元稹が江陵詩の自注に、南人染病、頓養烏鬼、とあり、養とはお禮参りすることなり。之によりて杜詩の養の字は養の字の誤ならんとの説あり。改むる要なし、杜詩と元注とは各、その義を成す。下に掲ぐるは殆ど無用の談に近きも古來やかましき烏鬼につき異説をあげおく。(イ) 夔州地方にては土地烏蠻に近きゆゑ戰死者が厲神となる、之を養ふために正月に十人百人と組みをなし酒宴を設け、大勢にて武器を操りて大摩をあぐ、之を養烏鬼といふ。是れ邵伯温が聞見録の説。これは文字は養烏鬼なるが、烏蠻の死者に事へるの義にて本詩とは關係なし。(ロ) 烏鴉を神に獻すること烏鬼と爲す、とは黃山谷別集の説。(ハ) 猪を以て烏鬼となすは漫叟詩話の説。(ニ) 鶴鶴を以て烏鬼となすは夢溪筆談の説。【四】 頓頓 ひとしきり、ひとしきり。每一食の意。【五】 黃魚 卷十七(六九一頁)をみよ。【六】 爲態 うはべの態をよくする。【七】 暗疎 外面は親しき様子をなして内面にはうとくする。【八】 治生 生計の方をたてる。【九】 渠 彼なり、輕蔑の人人をさす。

【題義】 たはむれにおどけたすがたの詩をつくり、むねのもたえをはらうた。大曆二年の作なるべし。

【詩意】この土地の異様な風俗はじつに不思議だ。ここの人人とはいつしよにすんでゐることはむづかしい。すなはち、どこの家でも烏といふ靈物を養うてゐるし、また一食ごとにきつと黃魚をたべてゐる。ふるくからのしり人はうはべをうまくつくり、新しくちかづきになつたものもすこしたつとはや内心ではこちらをうとんじてゐる。まづまづ自分は耕鑿をして生活の方をたてて、あんな人人とは無關係でゐるよりほかはない。

〔一〕

西歷青羌坂。南留白帝城。

西のかた青羌の坂を歴、南のかた白帝の城に留まる。

〔原注〕西歷自秦州。從同谷縣去遊蜀。留滯於巫山。

於菟侵客恨。拒妝作人情。

於菟客恨を侵す、拒妝人情を作す。

瓦卜傳神語。畚田費火耕。

瓦卜神語を傳へ、畚田火耕を費す。

是非何處定。高枕笑浮生。

是非何の處にか定まらむ、高枕浮生を笑ふ。

【字解】〔一〕青羌坂。秦州同谷等の地の坂をいふ、其の地に青羌の人種住す、故に青羌の坂といふ。〔二〕於菟。楚の方言にて虎のこと、「左傳」にみゆ。〔三〕拒妝。未粧に裳を和し蒸煎して作りしもの、ちまきの類なり。〔四〕作人情。贈り物とするをいふ。〔五〕瓦卜。巫が瓦をうちわり、その文理のまげぐあひを觀て吉凶をうらなふ。〔六〕畚田。草木を鋤きて肥料としてそこに種植をなす田、即ち火耕田。

【詩意】自分は西の方は青羌の居る坂地を歴て、いま南のかた白帝城に滯留をしてゐる。ここでは自分の客中の恨みを侵して虎があばれたり、他人に心ぞへをするときは「ちまき」などを用ひる。また瓦卜によつて神のおことばをつたへたり、火耕といふ面倒くさい耕作法による田などをつくるのである。さてこんな場所ではあるが他所とことどちらがよいかはきまるわけのものではあるまい。よつて自分は高枕で人生とは妙なものだと思つて笑つてゐるのみである。

昔遊

昔遊

昔謁華蓋君。深求洞宮脚。

昔華蓋君に謁して、深く洞宮の脚を求めむとす。

玉棺已上天。白日亦寂寞。

玉棺已に天に上る、白日亦た寂寞たり。

暮升艮岑頂。巾几猶未卻。

暮に升る艮岑の頂、巾几猶は未だ卻けられず。

弟子四五人。入來淚俱落。

弟子四五人、入り來りて涙俱に落つ。

余時遊名山。發軔在遠壑。

余時に名山に遊ばむとし、發軔遠壑に在り。

良觀遠夙願。含悽向寥廓。

良觀夙願遠ふ、含悽寥廓に向ふ。」

林昏罷幽磬。竟夜伏石閣。

林昏くして幽磬罷む、竟夜石閣に伏す。

王喬下天壇。微月映皓鶴。
 晨溪響虛駛。歸徑行已昨。
 豈辭青鞋胝。悵望金匕藥。
 東蒙赴舊隱。尙憶同志樂。
 伏事董先生。於今獨蕭索。
 胡爲客關塞。道意久衰薄。
 妻子亦何人。丹砂負前諾。
 雖悲髮鬢變。未憂筋力弱。
 杖藜望清秋。有興入廬霍。

王喬天壇に下る、微月皓鶴に映す。
 晨溪響虚しく駛し、歸徑行已に昨なり。
 豈に辭せむや青鞋の胝、悵望す金匕の藥。
 東蒙舊隱に赴く、尙ほ憶ふ同志の樂しかりしことを。
 伏事す董先生、今に於て獨り蕭索たり。
 胡爲れぞ關塞に客となりて、道意久しく衰薄なるや。
 妻子亦た何人ぞ、丹砂前諾に負く。
 髮鬢の變するを悲しむと雖も、未だ筋力の弱きことを憂
 杖を杖いて清秋を望む、興の廬霍に入らむとする有り。」

【字解】 一、華蓋君。崑崙山を二に華蓋といふ、仙人王子喬、華蓋君と號す、こは王屋山の或る道士をさしていふ。王屋山は山西
 省澤州陽城縣西南に在る山なり。本詩の王屋山道士に關係せる紀事は卷二十一に在る七言古詩「惜昔行」と參看し、東蒙に關する部分
 卷二の支那壇歌と參看すべきものなり。二、洞宮。道教にては地に洞三三十六所あり、八海中の靈山、五岳名山に皆洞宮ありと稱
 す。王屋山に洞あり、周四三里、小有清虛之天といふ、憶昔行に之を小有洞といへり。關とは山足をいふ。三、玉棺。華蓋君の寢
 たる棺、玉棺については後漢の王喬の故事あり、曰く、王喬葉縣の令たりしに、天、玉棺を堂前に降す、吏人推排すれども搖動せず、
 喬曰く、天帝獨り我を召すが、と。乃ち沐浴し、服飾して其の中に寝ぬるに、蓋便ち立るに覆ふ、と。四、上天。死せしをいふ。

【五】 良岑。東北のみれ、王屋山の東北に洞あり。【六】 巾几。華蓋君の生前用ひし頭巾、喘息。【七】 未御。推去せず、そのままに
 なしありしをいふ。【八】 弟子。惜昔行の盧老が徒をさす。【九】 遊名山。仇氏は梁宋に遊びし當時の事とせり。梁宋には限らざるべ
 し、齊趙其の他ひろくいへるなり。【一〇】 發軔。初は車輪の止め木なり、それを發するとは止め木をとり去りて出發すること。【一一】
 遺靈。王屋山のたにをさす。【一二】 良觀。よき面會、自己の崇敬する道士との會合はよき面會なり。【一三】 夙願。かたてのれがひ。
 【一四】 合懷。かなしき心をもつ。【一五】 寥廓。ひろき天をいふ。【一六】 王喬。古の仙人の名、或は云ふ、周の靈王の太子晉の化する
 所と。王喬かつて白鶴に乗じて河南の緱氏山頭に下る、こは華蓋君に比す。【一七】 天壇。王屋山の絶頂を天壇といふ。【一八】 皓鶴
 すなはち白鶴。【一九】 晨溪。聖朝とほりし溪水。【二〇】 駛。快と同じ、はやし。【二一】 行已昨。昨日行なり、今かへりゆくみ
 ちは已に昨日行きしみちなりとの意。【二二】 青鞋。靴。靴は足の皮のあつくなること。【二三】 金匕藥。金のさじで盛つた藥、道士鎮る
 所の不老長生の仙藥、下文の丹砂。【二四】 東蒙。蒙山、山東省沂州府蒙陰縣西南に在り。【二五】 舊隱。舊時の隱處、舊の字二様に分
 ちる。以前かくれし處へまたゆくにより舊といひしともみらる。然れどもこは今日より往時をさして舊といひしものにて、その時に
 は始めてかくれしなり。【二六】 同志樂。李太白等をいふならん。【二七】 伏事。ひれふしてつかへる。【二八】 董先生。時の蒙山の道
 士。【二九】 蕭索。さびしきさま。【三〇】 關塞。要州をさす。【三一】 道意。道教の道を求むる意。【三二】 何人。棄てがたきほどのも
 のにも非ざるにの意。【三三】 丹砂。鉛と汞（水銀）などを化合させてつくる、これができれば黄金しでき不死の藥もできるとかんがへ
 られたる。【三四】 負前諾。前時丹砂を鎮らんと決心せし、ことにそむく。【三五】 髮鬢。くろかみの白くなること。【三六】 廬霍。廬
 山と霍山、廬山は今の江西九江府にあり、霍山はもとの南岳にて安徽省六安府霍山縣の西北にある山の名なり。漢の武帝南岳を衡山と
 し、霍山の名を衡山に移す。詩は後世の霍山の義を用ひ、即ち湖南の衡山を意味す。時に董先生は衡山に居りしが如く、「惜昔行」に、
 更討衡陽董鍊師、の語あり。

【題義】 往年王屋山・東蒙山にあそび仙道を求めしことを追憶した詩、大曆二年夔州の作なるべし。
 【詩意】 ひかし自分は華蓋君といふ道士に謁して、深く洞宮の根もとをもとめようとした。ところが

その道士は死んで玉棺は天にのぼつてしまひ白日の光もさびしげにみえた。ひぐれに東北のみねの頂に升つたところ、道士の用ひてゐた頭巾や脇息はまだそのままにおいてあつた。そこへ四五人の弟子たちが入つてきて皆が涙を落した。自分はそのころ天下の名山に遊ぶつもりでまづ最初の出發としてさやうな遠方の壑まででかけたのだ。それに道士とのよい面會を得ようといふかねての願がかなはなかつたので、かなしさをいだいて寥廓たる天にうち向ふばかりであつた。その日は林はくらくなつてかすかな磨石も鳴らされず、自分は夜もすがら石閣にひれ伏してゐた。をりしも王子喬かともはれる仙人が天壇へおりてきた。かすかな月光が彼の乗つてきた白い鶴にうつろうてゐた。翌朝溪川のそばをとほると水は徒らに音をたててはやくはしつてゐる。昨日あるいたところを今はもどりみちとしてかへらねばならなくなつたのだ。鞋ばきの足にたがでできるくらゐはいとはぬが道士の金で盛る仙藥がうらめしくながめやられる。それからおもひきつて往年の蒙山の隱處へと赴いた。あのころの同志の人人とおもしろいめをしたことはいまだに記憶にある。あの時は董先生にお事へしたが、今ではじぶんひとりがかさびしいことになつてゐる。自分は何んでこんな夔州の關塞に旅客となつて道に志す念がなからく衰へてゐるのであるか。妻子は愛すべきものではあるが、何ものであればか、自分をほだして、遂に丹砂を得んとする昔日の決心に背いてゐる様なことになつてゐるのである。自分は黒髪が白くかはつたことは悲しむが筋力が弱つたことはしんばいしない。まだあかざの杖をついて清秋の天を望んで、南のかた廬山霽山（衡山）にいりこまうといふ興趣はもつてゐるのである。」

【字解】【一】奔處・去邊 奔の字去の字を雨に屬せしめ奔處紫崖黒・去邊白鳥明の意とみる説あり、今從はず。奔は崖に屬し、去は鳥に屬す。【二】黒 主語は雨なり。【三】明 主語は雨なり。【四】霽影・落聲 霽落は共に雨についていふ。霽を日に、落を江に屬せしむる説あり、今取らず。【五】野確 確はからうす、野確は屋外にさらされてある「うす」。【六】半濕 香航へかかる語。【七】香航 航はうるしは。

雨、四首

雨、四首

微雨不滑道、斷雲疎復行。

微雨道を滑かにせず、斷雲疎にして復た行く。

紫崖奔處黒、白鳥去邊明。

紫崖の奔る處に黒く、白鳥の去る邊に明かなり。

秋日新霽影、寒江舊落聲。

秋日に新霽影あり、寒江に舊落聲あり。

柴扉臨野確、半濕搗香航。

柴扉野確に臨む、半濕香航を搗く。

【題義】雨についてのべた詩。大曆二年の作か。黃鶴は漢西の作となし、浦氏は崖奔・澗瀕・神女・蛟人等の語によりて西閣の作なるべしとなしたるも何處なるや定めがたし。

【詩意】雨がかすかにふつて道をすべる様にはさせぬ程度であり、ちぎれた雲がまばらではあるがさ

まようてゐる。この雨氣は紫崖の勢の奔りさる處に黒くみえ、白鳥の飛び去るあたりには明るくみえてゐる。又この雨は秋の日の照るところには新しくその霑へる影をみせ、寒ぞらの江面にはあひかはらず落ちちるおとをたててゐる。このとき柴扉のしたのところには碓があつてなかばぬれた香粧を搗いてゐる。

〔二一〕

江雨舊無時。天晴忽散絲。

江雨舊時無し、天晴れて忽ち絲を散す。

暮秋霑物冷。今日過雲遲。

暮秋霑物冷かに、今日過雲遲し。

上馬回休出。看鷗坐不移。

馬に上りて回りは出づることを休め、鷗を見て坐して

高軒當澗瀕。潤色靜書帷。

高軒澗瀕に當る、潤色に書帷靜なり。

移らす。

〔二二〕

【字解】 〔一〕無時、きまりなしにふる。〔二〕散絲、雨脚のはそく散るさま。〔三〕霑物、うるはされた種類のもの。此の句は一般的にいふ。〔四〕過雲遲、雨あれば雲はゆるくすぐ。此の句は特にその時のことをいふ。〔五〕高軒、高齋ののき。〔六〕當澗瀕、澗瀕は堆の名、已にみゆ、浦氏は此の句を直接に實際を敘すとみるゆゑに西關の作かといへるなり。ただ作者は豐州に居ながら宜昌にある黄牛峽をもち來りて、黄牛峽水唯などいふこともあれば、此の句によりてあながちに西關の作とも斷じがたし。〔七〕潤色、草木巖石等のうるみたるいろ。〔八〕書帷、書齋のとばり、まく。

【詩意】 江上の雨はこれまでから何時ふるともなくふるのであつて、いまは天が晴れてゐたのに忽ち

絲をちらす様にふつてきた。ころしも秋の暮でこの雨にいろいろの物が冷かにぬらされ、特にけふはゆきすぎる雲の足もゆつくりしてゐる。自分は馬にのつてうちへかへつてからはこの雨で外出をみあはせ、じつとすわつて鷗をみつめてゐる。じぶんの高いのきはちやうど澗瀕堆とむきあつてゐるので、うるほひをふくんだ景物の色が室内にはひつてきて書齋のとばりがいと靜寂である。

〔三三〕

物色歲時晏。天隅人未歸。

物色歲時晏し、天隅人未だ歸らず。

朔風鳴淅淅。寒雨下霏霏。

朔風鳴りて淅淅たり、寒雨下りて霏霏たり。

多病久加飯。衰容新授衣。

多病久しく飯を加ふ、衰容新に衣を授く。

時危覺凋喪。故舊短書稀。

時危くして凋喪を覺ゆ、故舊短書稀なり。

【字解】 〔一〕歲時晏、晏は晩なり、歳のくれかかるといふ。〔二〕天隅、天の一隅の意。豐州をさす。〔三〕淅淅、風の細小なる聲のさま。〔四〕霏霏、雨の微かにふるさま。〔五〕授衣、寒さにむかふにより家長が家族に防寒衣をわたすこと。〔六〕詩に、九月授衣とみゆ。〔七〕凋喪、氣力のおとろへること。〔八〕短書、みじかき手紙。

【詩意】 景物の色が歳のくれめいてきたのに、天の一隅にゐてじぶんはまだ故郷へかへらずにゐる。北風は淅淅として鳴り、寒雨は霏霏としてふりしきる。多病の身はながらくつとめて食事を増す様に

し、衰へたすがたにはあらたに衣をわけて着添へをした。時世危難のあひだに氣力がうせたとおもふのに、ふるい知りびとからは短い手紙さへもめつたによこしてくれぬ。

〔四〕

〔四〕

楚雨石苔滋。京華消息遲。楚雨石苔滋し、京華消息遲し。

山寒青兕叫。江晚白鷗飢。山寒くして青兕叫び、江晩れて白鷗飢う。

神女花鈿落。鮫人織杼悲。神女花鈿落つ、鮫人織杼悲し。

繁憂不自整。終日灑如絲。繁憂自ら整へず、終日灑ぐこと絲の如し。

【字解】〔一〕楚雨 豊州の雨。〔二〕滋 多くなること。〔三〕京華 長安。〔四〕青兕 兕は野牛。〔五〕神女花鈿 神女は巫山廟の神女、花鈿は花かんざしの類、趙注にはいふ、實物の花を神女の像につけたるなりと。部注にはいふ、花鈿は面上にはりつける飾りなり、と。執れが富れるやを知らず。〔六〕鮫人織杼 杼は機（はた）のひしなり。鮫人は吳郡賦に、泉客潛織、而卷杼。江賦に鮫人杼於懸流、とある鮫人、泉客なり。水中に住みて機織をなすもの。此の句は空想を用ふ。江國にそんなものが居るとの假定に本づく。〔七〕不自整 心緒をみづからととのふるあたはず。〔八〕灑 雨のそそぐをいふ。

【詩意】楚地の雨によつて石上の苔がふえたが、みやこのたよりはおそくてまちどはしい。山は寒くて青い野牛がさけび、江がくれかかつて白い鷗がひもじさうにしてゐる。巫山の廟では神女の像から花鈿が落ちちり、水中の鮫人の織るてふ機杼のおとも悲しげである。このぞりじぶんの胸中のさま

さまの憂はそのみだれをととのへようとしてもとのへられぬほどであるが、その心緒にも似たるごとくこの雨は日もすがら絲の様にふりそそいでゐる。

大覺高僧蘭若 【原注】和尚、去冬往湖南

大覺高僧の蘭若 【原注】和尚、去冬湖南に往く。

巫山不見廬山遠。巫山には見えず廬山の遠、

松林蘭若秋風晚。松林の蘭若秋風の晩。

一老猶鳴日暮鐘。一老猶ほ鳴らす日暮の鐘、

諸僧但尙乞齋時飯。諸僧但尙ほ乞ふ齋時の飯。

香爐峰色隱晴湖。香爐の峰色晴湖を隠す、

種杏仙家近白榆。種杏の仙家白榆に近し。

飛錫去年啼邑子。飛錫去年邑子を啼かしむ、

獻花何日許門徒。獻花何の日か門徒に許さむ。

の慧遠法師、姓は賈氏、晉時の僧、廬山西北麓の東林寺に居る。今以て大覺に比す。〔一〕松林蘭若 松林中の蘭若、豊州にあるもの

大覺高僧蘭若

三九九

【字解】〔一〕大覺 高僧の名。

〔二〕蘭若 梵言にて阿蘭若、漢語にては無諍・空静處の義なりと。僧居にして寺よりは小なるものなり。この蘭若の所在地は詩には巫山とあれど、廬山廟のごとくにもあれど、豊州にてつれに巫山を口にする作者のことなれば、巫山なりとはさだめがたし。蓋し豊州近郊にありしものならん。〔三〕和尚 大覺をさす。〔四〕湖南 彭蠡湖の南、湖は江西省廬山の東南にあり。〔五〕廬山遠 廬山の東南にあり。

をさす。【七】秋風、秋風の吹く日暮。【八】一老、老人。【九】何乞、乞の字音氣、興ふる義、時時乞酒錢、(卷三、二八六頁)の乞と同じ。【一〇】齊時飯、おときのいはん。以上起四句は巫山についていふ。【一一】香爐峰、廬山に在る峰の名。【一二】隱晴湖、晴湖は晴れた彭蠡湖、隱とは峰高きを以て作者の眼より湖をかくれさすなり。【一三】種杏仙家、養の董奉が故事。奉、廬山に居り人の病を治し、その報いとして病重き者には杏五株を種ふ、輕き者には一株を種ふしむ、董仙が杏林と號す。晴に大覺の湖南の層を比せしならん。【一四】近白榆、高く天上に近きをいふ。古詩に曰く、天上何所有、歷歷種白榆、と。春秋運斗樞に云ふ、玉衡星、散じて榆となる、と。白榆は星なり。【一五】飛鶴、佛家にては僧の遊行することを飛鶴、安住することを掛鶴といふ。天台山賦に懸鶴(懸漢のこと)飛、鶴以、願、處の語あり。飛鶴とは鶴杖を飛ばすなり。高僧隱峰といふもの五臺山に遊ばんとするとき淮西を出づるや鶴をなげうち空に飛ばして四天に往きしとの話「釋氏要覽」にみゆ。又梁の東誌、白鶴道人と舒州の潛山に往くことを讀ひ、道人は鶴に乗りて山麓に至り止まらんとせしとき忽ち空中に鶴の飛ぶ聲して鶴が鶴先づ卓てられたりとの話あり。【一六】去年、作者の注の「去冬」なり。【一七】邑子、同邑の人の子、巫山の縣民をいふ。【一八】獻花、趙注に後分細を引き、釋迦が初め淨惠仙人たりしとき五蓮花を燃燈佛に獻じたるを獻花の祖なりといへり。又高僧傳に戒行嚴潔なれば天女來りて花を獻することあり。こゝは大覺に對して花を獻せんとするをいふ。【一九】許門徒、門徒とは一門の徒屬なり。佛家にては諸弟子の來り從ふものをさして門徒といふ。こゝは大覺に對して自己を門徒といへり。句意は大覺の方へ往きて從はんと欲するをいふ。仇注に「大覺の同らんことを愛む」といへるは非なり。香爐以下の四句は湖南大覺の方をいひ、獻花の句を以て自己と結びつけたり。

【題義】高僧大覺和尚の蘭若を尋ねて作りたる詩。大曆二年の作か。

【詩意】いま松林のなかの蘭若で秋風の吹く日ぐれであるが、ここの巫山では廬山の懸遠に比すべきあなたを見ることはできぬ。しかしあなたの居られたときの様にひとりの老人は日暮をつげる鐘をつきならしてゐるし、また多くの僧侶たちは以前の様におときの食事をそなへてくれてゐる。こゝこからあなたの居られるところを想望すると、香爐峰がじやまをしてあなたの居られる湖水を隠してしまひ、杏樹を種ゑた仙家に比すべきあなたの住居は天上の白榆に近いほど高いところにある様なこゝちがする。去年あなたがこゝから錫を飛ばしてそちらへゆかれたため、こゝの信者たちはみんないて悲しんだが、あなたはいつ門徒たるわたくしがそちらへ往つてあなたに花をささげることが許してくださるであらうか。

謁眞諦寺禪師

眞諦寺の禪師に謁す

蘭若山高處、煙霞嶂幾重。
 蘭若山高き處、煙霞嶂幾重ぞ。
 凍泉依細石、晴雪落長松。
 凍泉細石に依る、晴雪長松より落つ。
 問法看詩妄、觀身向酒慵。
 法を問へば詩を看るに妄なり、身を觀すれば酒に向ふも慵し。
 未能割妻子、卜宅近前峰。
 未だ妻子を割くこと能はざるも、卜宅前峰に近づかむ。

【字解】【一】眞諦寺、所在明かならず、豐州に在るならんか。【二】嶂幾重、嶂はたかきやま、寺の在る所の山以外の山をさす、幾重とはそれらの山山が寺山の外部に重なりあうてゐるをいふ。【三】凍泉、こぼつた泉。【四】依細石、細小なる石によりそつてなされる。【五】晴雪、天の快晴にあたる雪。【六】落長松、長松は喬松、晴天ゆゑ暖氣にとけてくづれおつるなり。凍泉二句は苑中の景物。二句王維が泉聲咽危石、日色冷青松、と並稱せらる。【七】問法、法は佛法。【八】看詩妄、妄は妄念。【九】觀身、一

身を佛法の道理を以て照らして觀る。【一〇】 猶、ものうし。【一一】 未能、この二字「杜康」には下句までかけてみるべしといへり。余は此の句かぎりにみる。【一二】 ト宅、此の句は希家なぶ。

【題義】 眞諦寺の禪師に謁したことをよんだ詩。作時は不明。

【詩意】 この寺の僧居は山の高い處にあつて、外部にはさらに煙霞を帯びた山がいくへにもかさなつてゐる。庭苑をみると凍つた泉水が細かな石によりそうてかすかにながれてゐるし、晴れてとけかかつた雪が高い松のうへからどさりと落ちてきたりする。禪師から法の理をきいてみるとじぶんの大好な詩を看ても妄念のかたまりらしくおもはれ、一身を觀じてみれば大好な酒に向ふこともものうい様なここちがする。それでじぶんは悟りきつて妻子の恩愛まで割きすてることはできぬけれども、前峯にちかく住宅を卜したいものだとかんがへるのである。

上卿翁請修武侯廟遺像缺落時崔卿權夔州

卿翁に上つて武侯廟の遺像の缺落を修めむことを請ふ、時に崔卿夔州に權たり

大賢爲政即多聞 大賢政を爲す即ち聞多し、

刺史眞符不必分 刺史の眞符必ずしも分たれず、

尙有西郊諸葛廟 尙ほ西郊の諸葛廟有り、

【字解】 【一】 卿翁、崔卿翁をいふ、卿は單に尊稱として用ひしならん、翁は年長者ゆゑにいふ。作者の母方の舅なり。【二】 武侯廟、白帝

臥龍無首對江濱 臥龍首の江濱に對する無し。

城の西郊に在りしもの、之に就きては「武侯廟」(下ノ上冊三二六頁)と變

州歌(第九(同冊三七〇頁)・關先主廟(同冊四四二頁)・古柏行)の孔明廟の句解(同冊四四六頁)・「跡懷古蹟」第四首の武侯祠屋の句解(同冊六五一頁)・同上第五首の宗臣遺像の句解(同冊六五三頁)等を參看すべし。此には南宋の王十朋が撰せる祠堂記を仇本により録出して參考に供す。記の略に曰く、武侯故祠、在州(南宋時の夔州)之南門、沿城而西、三十六步、無斷碑遺刻、以考其歲月之始、見於圖經者、略焉、在隋唐時、治白帝、史載、少陵詩曰、「西郊諸葛廟」、即ち本篇中の語)者、其地於益平、□門之東、去廟一百八十五步、城有臺、下臨八陣圖、登臺而望、則常山之蛇、四面八尾之勢、宛其在目、北直鄒倉、倉故永安宮也、據輿壇、狀如屏、宮之北有水、曰清瀆、瀆田乎兩山間、東入於江、又東過澗澗、入於峽、峽口有山、卓然立乎羣時之外、者白雲也、可謂江山之勝矣。【三】 崔卿、即ち上に卿翁と稱せし同一人。【四】 權、權攝なり、かりに夔州刺史の任にあたるなり。浦氏云ふ、前に「送王信州(信州は夔州の古名、望北歸)詩あり、詩は卷十九に見ゆ。王、守を罷めて去りし故に崔卿翁、州事を權攝せしなり、と。蓋し然らん。【五】 大賢、崔翁をさす。【六】 多聞、令聞多きをいふ、たくさんよい評判がたつ。【七】 刺史眞符不必分、眞符を分たるとは刺史の本官となるをいふ。漢の制に、刺史を任ずれば、朝廷は之に銅虎符・竹使符を分ち、その半分づつを京師と地方とに置く。【八】 臥龍、諸葛亮をいふ、こゝは其の遺像をさす。【九】 江濱、濱は水涯なり。

【題義】 をちさんの崔翁にたてまつつて諸葛武侯の廟の遺像のかけたのを修繕することを頼んだ詩。このとき崔翁は夔州の刺史心得をつとめてゐた。作時は明かならず。

【詩意】 あなたはいまこの土地の刺史心得でをられるが、賢人の政を爲すやいつもよい評判がたくさんにある。本官になられるを待つまでもないのである。そのうちでまだ一つ遺憾な事がある、それは西郊の諸葛廟である、あの廟では臥龍とよばれる孔明が江のほとりにむいてはゐるもの首な

しであるのである。龍が首なしでは江水にむかつてをれぬではありませぬか。

奉送卿二翁統節度鎮軍還江陵

卿二翁が節度の鎮軍を統べて江陵に還るを送り奉る

火旗還錦纜。白馬出江城。火旗錦纜還る、白馬江城を出づ。

嘹唳吟笳發。蕭條別浦清。嘹唳吟笳發す、蕭條別浦清し。

寒空巫峽曙。落日渭陽情。寒空巫峽の曙、落日渭陽の情。

留滯嗟衰疾。何時見息兵。留滯嗟衰疾なり、何時か息兵を見む。

【字解】 一 卿二翁 二は翁の排行、即ち前篇の崔翁。 二 統節度鎮軍 此の句につき諸家注せず、蓋し荆南節度使の軍の變に駐

鎮せしものを統率するをいふなり。 三 江陵 荊州。 四 火旗 朱旗なり、かかる旗をたてての意。 五 還錦纜 錦のとしづなを用ふる船が江陵へとかへるをいふ。 六 白馬 崔の騎る馬をいふ。 七 江城 夔州の城。 八 嘹唳 鳥のなくおと、以て笳聲に比す。 九 別浦 別支の江浦、蓋し渭水をささるならん。 一〇 一説に送別の浦とく、今従はず。 一一 渭陽情 なちを送る情をいふ。 一二 詩の奉風「渭陽」篇に、我送舅氏、曰至渭陽、とみゆ。この時は秦の康公が即位後（即位は魯の文公七年にあり）在時自己の太子たりしとき魯の文公を送りしことをおもひて作りたりといはる。康公の母は魯より秦へ嫁せし人にて文公の嫡にあたり。故に文公は康公のなちにあたる。文公は魯國の亂にあひ出でて諸國を流浪し、のちに秦のおかげにて歸國して即位せし人なり。康公が文公を送りしは其の秦より魯へかへるときに魯の僖公の二十四年の事なり。詩句の意は舅氏文公を送りて渭水の陽（咸陽の地方）までゆくといふなり。 一三 息兵 いくさをやめる。翁の統軍と自己の川峽の希望とをわはせふくみていへり。

【題義】 をち崔翁が荆南節度の鎮軍を統率して江陵のかたへ還るのを送つた詩。大曆二年の作なるべし。

【詩意】 白馬にのつた統軍者（崔翁）が江ぞひの城からでかけ、まづかな旗をおしたてて錦纜の舟が、かへりゆく。かなしげに笳聲がおこり、支流の浦へはさびしく水がすんでゐる。寒空のけさの巫峽のあけぼののさま。またいま日のおちかかるときの渭陽に舅氏を送るときは、いふにいはれぬものがある。じぶんはこの地に留滯してなげかはしくも老衰疾病にかかつてゐる、いつになつたらいくさのやむのを見ることができようか。

久雨期王將軍不至 久雨、王將軍を期するに至らず

天雨蕭蕭滯茅屋。天雨蕭蕭茅屋に滯る。

空山無以慰幽獨。空山以て幽獨を慰むる無し。

銳頭將軍來何遲。銳頭の將軍來ること何ぞ遅きや、

令我心中苦不足。我をして心中足らざるに苦しましむ。

數看黃霧亂玄雲。數看黄霧の玄雲に亂るるを、

奉送卿二翁統節度鎮軍還江陵 久雨期王將軍不至

【字解】 一 王將軍 將軍の名詳ならず。黃霧は以て王承俊となすも是に非ず。 二 銳頭將軍 秦の將白起、其の頭小にして鋭し。今借りて王將軍をさす。 三 冷冷 水の鳴る音。 四 窮陰 陰氣の窮まらんとする。 五 歌 小明の題、

時聽嚴風折喬木。 時に聴く嚴風の喬木を折るを。
 泉源冷泠雜猿狖。 泉源冷泠猿狖に雜はる、
 泥濘漠漠飢鴻鵠。 泥濘漠漠鴻鵠飢う。
 歲暮窮陰耿未已。 歲暮窮陰耿として未だ已まず、
 人生會面難再得。 人生會面再び得難し。
 憶爾腰下鐵絲箭。 憶ふ爾が腰下の鐵絲箭、
 射殺林中雪色鹿。 射殺す林中雪色の鹿。
 前者坐皮因問毛。 前者皮に坐して因つて毛を問ふ、
 知子歷險人馬勞。 知る子が險を歷て人馬勞せしを。
 異獸如飛星宿落。 異獸飛ぶが如く星宿落つ。
 應弦不礙蒼山高。 弦に應じて礙げられず蒼山の高きに。
 安得突騎只五千。 安んぞ得む突騎只だ五千、
 峯然眉骨皆爾曹。 峯然たる眉骨皆爾曹が曹。

【一】は憂心不斷の意に用ふ。【二】會面、面會なり。【三】憶爾、爾は王將軍をさす。【四】鐵絲箭、細身の鐵條箭ならん。【五】雪色鹿、白き鹿。【六】前者、往日。【七】坐皮因問毛、作者、將軍の射とめし鹿皮に坐して其の毛色の純白なるをみてあやしみ問ひて將軍の射し所のものなるを知る。射殺と問毛とは倒挿法を用ひて敘したり。【八】星宿落、宿は列星、星宿の如く紛紛として射られ落つるをいふ。【九】不礙、射を妨げざるをいふ。【十】蒼山高、山高ければ技の拙なる者は射にくきことあるべし。【十一】安得、希望の辭。【十二】峯然、たかき貌。【十三】爾曹、汝等の徒。【十四】相催促、他の同志をうながす。【十五】一豁、ふさがりし心を全く開きひろくする。【十六】明主、

走平亂世相催促。 走りて亂世を平げ相催促し、
 一豁明主正鬱陶。 一に明主の正に鬱陶たるを豁くせむ。
 恨昔范增碎玉斗。 恨む昔范増玉斗を碎きしを、
 未使吳兵著白袍。 未だ吳兵をして白袍を着けしめず。
 昏昏闔閭閉氛祲。 昏昏闔閭氛祲に閉づ、
 十月荆南雷怒號。 十月荆南雷怒號す。

謀の用ひられざるに比す。【一】吳兵著白袍、梁の陳慶之、屢々北魏の軍を破る。其の麾下悉く白袍を着け、向ふ所披靡す。慶之は義興の人、故に其の部下を吳兵といへり。慶之を以て王將軍に比す。【二】闔閭、天門、宮城の門をいふ。【三】氛祲、惡氣なり。吐蕃の鄯、靈への侵入をさす。【四】荆南、楚南、夔州をさす。荆揚といふ類。

【題義】なが雨のをり、王將軍が尋ねてくれる約束であつたのに來なかつたことをよんだ詩。大曆二年冬十月の作。

【詩意】雨がしとやかにふるのに自分は茅屋に滞留してゐる、だれもをらぬ山の中では獨居のさびしさを慰めるよすがもない。白起みたいなピリケン頭の將軍はなんで約束しながらくるのが遅いのか、自分の心をかくまでにやきもきさせるのである。黄霧が玄雲にみだれあふのをなんべんみたか、時

としてはひどい風が喬木を折るおともきく。泉のさらさら鳴るおとが猿狖の聲といりまじり、どろどろのぬかるみはひろく連つて鴻陽がひもじさうに飛んでゐる。歳はくれかかり陰氣はおしつまり、心のうれひはやまぬ、あなたとの面會はまたとできがたいのではないか。それにつけておもひだす、おまへが腰につけた細身の鐵箭、それで林中の雪の様な白い鹿を射とめたことを。かつてじぶんはその鹿の皮にすわつて毛のことから鹿の話になり、そのころおまへが險阻な場所をとほつて人馬ともなんざした由來をきいた。鹿ばかりではない、さまざまのかはつた獸がおまへの弦に應じて星がみだれる様に飛んで落ちて来て、いくら高山でもおまへの射術をさまたげることとはできなかつたといふことであつた。』どうしたならばおまへの様な高い眉骨をそなへた突騎をたつた五千人でよいから手に入れ、同志をうながして走り出で早く亂世を平げて、明天子の鬱陶としてふさいでをられるむねのうちをすつかりくつろげたてまつることができようか。恨めしいことではないか、むかし范增はせつかくの自己の謀が用ひられぬので玉斗をうちくだいてしまつた、また陳慶之の様な大將が居れば呉兵も白袍をつけていさましく敵を破るのであるが、今はさうではない。(おまへはまだ用ひられるまでになつてはをらぬのである)。さうして北では宮門は昏昏とくらぐ兵亂の惡氣のうちに閉ぢられ、南ではこの荆南の地(夔州)で十月に雷が怒號するといふ非時の天候である。』

虎牙行 【原注】蕭統借號江陵口屯兵於此後常爲屯戍之地。

虎牙行 【原注】蕭統江陵口に營置し、兵を此に屯す、後常に屯戍の地と爲る。

秋風歎吸吹南國。 秋風歎吸として南國を吹く、
 天地慘慘無顔色。 天地慘慘として顔色無し。
 洞庭揚波江漢迴。 洞庭波を揚げ江漢迴る、
 虎牙銅柱皆傾側。 虎牙銅柱皆傾側す。
 巫峽陰岑朔漠氣。 巫峽の陰岑に朔漠の氣あり、
 峰巒窈窕谿谷黑。 峰巒窈窕として谿谷黒し。
 杜鵑不來猿狖寒。 杜鵑來らず猿狖寒し、
 山鬼幽憂霜雪逼。 山鬼幽憂して霜雪逼る。』
 楚老長嗟憶炎瘴。 楚老長嗟して炎瘴を憶ふ、
 三尺角弓兩斛力。 三尺の角弓兩斛の力。
 壁立石城橫塞起。 壁立せる石城塞に横はりて起る、

虎牙行

【字解】(一) 虎牙 山の名、宜

昌の東南にあり、荆門と對す、荆門は南にあり、虎牙は北にあり、虎牙の石壁の色、紅間に白あり、文、牙の形に類すといふ。(二) 蕭統 北周の蕭巖が孫にして隋の義寧二年に帝を稱し、後唐の高祖のために斬らる。浦氏は此の注文は詩意と無關係なれば作者の自注に非ず、後人の妄添なるべしといへり。しかし何か参考のために作者が書きおきしやも知れざるなり。(三) 歎吸 蕭統の意なりと、歎また歎に作る、歎吸は疾き貌、蕭統が高松賦に、卷二風鳴之歎吸、江淹が雜體詩に歎吸臨風鳴、などとあり。(四) 壁立 壁立

金錯旌竿滿雲直。金錯の旌竿雲に満ちて直し。

漁陽突騎獵青丘。漁陽の突騎青丘に獵す、

犬戎鎖甲圍丹極。犬戎の鎖甲丹極を圍む。

八荒十年防盜賊。八荒十年盜賊を防ぐ、

征戍誅求寡妻哭。征戍誅求寡妻哭す。

遠客中宵淚霑臆。遠客中宵淚霑を霑す。

【一】 幽憂。ふかきつれひをしつ。【二】 楚老。楚地の父老、一般的にいふ、南翁といふ類。【三】 德炎瘴。あまり寒冷ゆゑ節つて炎暑の瘴氣をおしふ。【四】 三尺角弓。角でかざつた短き弓、短き弓はつよし、寒ければ更につよさをなます。【五】 兩解力。重き二解のものと敵するだけの力を要す。【六】 壁立。きつたて。【七】 石城。石地の城、夔州城をさす。【八】 橫塞。關塞につちなるをいふ。【九】 金錯。竿部に金を鑲刺せるもの。【一〇】 滿雲直。高處に多く直立す。【一一】 漁陽突騎。安祿山の叛騎をいふ。【一二】 青丘。青丘は山東青州府樂安縣治、獵は「八荒」第二首の火焚乾坤獵の獵(下ノ上册四七一頁)と同意、賊軍、かりなする氣分にて黃城を恣にすること。【一三】 犬戎。吐蕃をさす。【一四】 鎖甲。くさりなどをさす。【一五】 丹極。宮城をいふ。【一六】 八荒。八方のはて。【一七】 十年。乾元元年より大曆二年までにて十年。【一八】 遠客。作者自己をさす、此の一句は單句なり。

【題義】夔州にあり秋の風氣の寒冷なるにあうて感亂を傷んだ詩。題は詩中の文字を摘出したるまでにて特に虎牙山についてのべしものにあらず。大曆二年夔州にての作なるべし。

【詩意】秋風が疾く南國を吹きたてて、天地はものがなしさうにはればれとした様子はなく、洞庭湖は波を揚げ江漢の水流は回旋し、虎牙や銅柱はみなかたむいた。巫峽の北むきのみねにも北方沙漠の様な氣があり、蜂蠻はおくふかく黔谷は黒ずんでゐる。ほととぎすはこす、猿猴のなきごゑは寒げに、山鬼もしんばいしていまにも霜や雪がふつてきさうである。この土地の老人はためいきしてかへつて暑氣のときがよいかんがへる。三尺の角弓をひくには兩解の力を要するほどである。このとき壁立萬仞ともいふべき石地の城(夔州の城)は關塞につらなつて起り、城上の雲の在るあたりには金をちりばめた旗竿がいつばいに直立してゐる。いつたい安祿山が謀反して漁陽の突騎が青丘の方へと獵することくにおしよせ、つづいて犬戎の様な吐蕃のくさりをどしよろひがみやこの宮城を圍むやうになり、四方八方この十年がほどは盜賊を防ぐことをつとめてをり、あるひは征戍にやられ、あるひは税金を誅求され寡婦がしのびなきをしてをる。こんなことをかんがへるとこの遠方の客たる自分はやなかに涙がむねをうるほすのである。』

錦樹行

今日苦短昨日休。今日は短きに苦しむ昨日は休す、

歲云暮矣增離憂。歲云に暮れぬ離憂を増す。

錦樹行

今日は短きに苦しむ昨日は休す、

歲云に暮れぬ離憂を増す。

【字解】【一】錦樹。前に已にみゆ。この錦樹は詩中のみゆる如く霜にあひてもみぢする樹たるを知

霜凋碧樹作錦樹。

霜に凋みて碧樹錦樹と作る。

萬壑東逝無停留。

萬壑東逝して停留すること無し。

荒戍之城石色古。

荒戍の城石色古りたり。

東郭老人住青丘。

東郭の老人青丘に住す。

飛書白帝營斗粟。

書を白帝に飛ばして斗粟を營む。

琴瑟几杖柴門幽。

琴瑟几杖柴門幽なり。

青草萋萋盡枯死。

青草萋萋盡く枯死す。

天馬跛足隨鼂牛。

天馬跛足鼂牛に隨ふ。

自古聖賢多薄命。

古より聖賢多くは薄命なり。

姦雄惡少皆封侯。

姦雄惡少は皆侯に封せらる。

故國三年一消息。

故國三年に一たび消息あり。

終南渭水寒悠悠。

終南渭水寒くして悠悠たり。

五陵豪貴反顛倒。

五陵の豪貴は反つて顛倒す。

鄉里小兒狐白裘。

鄉里の小兒は狐白の裘。

生男墮地要齊力。

生男地に墮ちなば齊力あるを要す。

一生富貴傾邦國。

一生富貴邦國を傾けむ。

莫愁父母少黃金。

愁ふる莫れ父母黃金少きを。

天下風塵兒亦得。

天下風塵あらば兒も亦た得む。

香あり、今り香による。或は樂・圖と書す。西南徼外に産する黒色の牛、ヤケの類。鈍物の意に用ひたり。【一三】五陵、長安にあり、已にみゆ。【一四】顛倒、もとの貴者が賤しくなり、賤者が貴くなりしをいふ。【一五】鄉里、長安をいふ。【一六】狐白裘、狐腋の白毛の部分をつづりて作りしかは、ころも、價千金のものなり。【一七】墮地、地上に生れおつるをいふ。【一八】齊力、せげれの力。【一九】傾邦國、傾は盡くす、舉るといふほどの意ならん。【二〇】風塵、塵風あるをいふ。【二一】兒亦得、この得の字、是非得失などの得の字の如く解するものあり、朱注是れなり、朱注は楊貴妃の時、天下女を生むを喜びしことをあげ、こゝはそれを翻案せしものとし、男兒も亦よしとの義となせり。然れどもそんなに迂回して説かずとも直ちに前文に就きて、得字の目的語を「一生富貴」の「富貴」とみれば事足るべし。「富貴を得らるべき」をいふ。即ち卷二十「復愁」詩中の「聞關驢」小子、談笑竟封侯」の意。

【題義】錦樹の時節に感したことをのべた詩。錦樹のことをうたへるものにはあらず。黃鶴は大曆二年東屯にての作なるべしといへるも、瀼西の作ならん。

【詩意】きのふは了つてしまひ、けふは短かすぎる。こんなに時間を悠張つてみても歳は暮れかけて

る。權が漆が板か板かその何たるやは明かならず。暫く「もみぢ」と調じおく。【二二】休、過ぎりしをいふ。【二三】東逝、水の東に流れゆくこと。【二四】荒戍之城、一句、前篇に見えし石城と同意を語法をかへていふ。【二五】東郭老人、自己をさす、瀼西は豐州の東郭にあり。【二六】青丘、趙注に、瀼西之居、在東郭、亦名青丘、手、といひ、青丘を以て瀼西の居地の名なるが如く疑へり。仇注には青丘恐、是瀼溪といへり。青丘を古典に求むるに齊地の青丘（即ち前篇其他に見ゆるもの）は別として、「淮南子」本經調に堯の時事を記したる處に「青丘之澤」あり、注に、青丘東方澤名也とあり。作者或は瀼溪のことに借用せしものか。【二七】飛書白帝、白帝の方へ手紙をやる。蓋し其の故書の人に財物を請ひ求む

我が他との離居の憂はふえてくる。まへには碧であつた樹もその葉は霜にしばまされて錦樹にかはつてくる、萬壑の水は東流し去つてすこしもとどまることはない。石色の古びた荒れた成衛の城で、その東郭にあつてこの老人は「青丘」ともいふべきところに住み、白帝城の知人に手紙を飛ばしては無心をいうて米櫃の算段をなし、琴瑟几杖を友として柴の門しづかにくらしめてゐるもの、いままで妻妾としげつた青草はみんな枯れ死して、天馬もちんばをひいて羸牛のあとにくつついてゆくのもりさまだ。むかしから聖賢は多く薄命のもので、姦雄や悪少年どもはみんな侯に封せられてゐる。ふるさとは三年にいちどたよりがあるくらゐのもので終南の山・渭水の水はいたづらにはるかに寒色をたたへてゐる。五陵の豪貴らは昔とは形勢がひつくりかへつて今の連中はむかしの貧賤であつたものどもだ、さうしてその以前の小僧たちがいまは狐白の裘をきて威張つてゐるのだ。(今の様子からいふと)男の子をうみおとしたなら背骨の力のつよいやつをうむ必要がある。さうすれば一生に一國をつくすほどの富貴が求められる。父母たちに黄金がないなどといふことをしんばいするにおよばぬ。天下に騷動がおこりさへすればちぎにこどもが富貴を得ることができるのである。」

自平

自平

自平中官呂太一

中官呂太一を平げしより

【字解】(一)中官。宦官。(二)

收珠南海千餘日

珠を南海に收むること千餘日。

近供生犀翡翠稀

近ごろ生犀翡翠を供すること稀なり、

復恐征戍干戈密

復た恐る征戍干戈の密ならむことを。」

蠻溪豪族小動搖

蠻溪の豪族小しく動搖す、

世封刺史非時朝

世封の刺史非時に朝せしむ。

蓬萊殿前諸主將

蓬萊殿前の諸主將、

才如伏波不得驕

才如伏波の如くなりとも驕ることを得ず。」

三年、即ち千餘日となる。【一】供。朝廷へ供獻すること。【二】生犀。いた犀をいふならん。【三】翡翠。鳥の名。【四】干戈。兵器と相接するをいふ。【五】蠻溪豪族。廣東近地の溪居の蠻人の豪族。【六】小動搖。さわぎかける。大曆二年九月、桂州の山獠、州城を陥れ、刺史李良遁れ去る、故に小しく動搖すといふ。【七】世封刺史非時朝。唐の太宗の時、溪河の蠻酋の歸順せし者は皆世襲史を授く。これ世封刺史なり、非時朝とは彼等の朝貢には常期を以て責めざるをいふ。いつにても都合のよき時に入朝せしむるなり。【八】蓬萊。卷十七、秋興八首第五、蓬萊宮闕の句解をみよ。【九】殿前諸主將。宦官にして禁軍を掌るものをさす。【一〇】伏波。後漢の馬援、伏波將軍に拜し、曾て交趾を平ぐ。後ち五溪の蠻を征し蠻頭の困みあり。以て戒とすべきをいふ。

【題義】宦官が廣東附近の蠻人に兵を用ひんとするを戒めた詩。自平の二字は起句の初の二字を切り取りて用ふ。大曆二年の作なるべし。

【詩意】中央朝廷では宦官呂太一の亂を平げてから三年ばかり南海の地方から眞珠を手に入れた。ところが近頃は南海から犀や翡翠を供獻することが稀である。それで自分はまた南方へむけて征伐がひきつづき行はれはせぬかと恐れるのである。我が唐の國初に於ては歸順の溪蠻を世襲の刺史に任じ時をきめずに入朝させるといふ風に之を優遇してあるのだ。いま溪蠻の豪族がすこし動搖しはじめたとのことだ。してみれば蓬萊殿前の主將たちよ、おまへたちは、たとひ伏波將軍の様な才能があつたとしても驕慢になつてはならぬはずだ。氣をつけなければいけない。」

寄裴施州

裴施州に寄す

廊廟之具裴施州、
廊廟の具裴施州、
宿昔一逢無比流、
宿昔一たび逢ひしに比流無かりき。
金鐘大鋪在東序、
金鐘大鋪東序に在り、
冰壺玉衡懸清秋、
冰壺玉衡清秋に懸る。
自從相遇減多病、
相遇ひしより多病を減す、
三歲爲客寬邊愁、
三歲客と爲りて邊愁寛なり。

【字解】「一」裴施州。裴は以て裴見なりとなせしむ、朱注に史實を考證して其の裴見に非ざることを論ぜり。裴にはあらず、其の名は知り難し。施州は今の湖北施南府施恩縣治、裴州の東南にあたる。裴某は其の刺史なり。「二」廊廟之具。廟堂の器の意。大政治家たるに足るな。いふ。「三」比流。比倫、類流、な

堯有四岳明至理〔治〕、堯には四岳有りて至理〔治〕を明かにす、

漢二千石眞分憂、漢の二千石は眞に憂を分てり。

幾度寄書白鹽北、幾度か書を寄す白鹽の北、

苦寒贈我青羔裘、苦寒我に贈る青羔裘。

霜雪迴光避錦袖、霜雪光を迴して錦袖を避く、

龍蛇動篋蟠銀鈎、龍蛇篋に動きて銀鈎蟠る。

紫衣使者辭復命、紫衣の使者辭して復命せむとす、

再拜故人謝佳政、再拜して故人に佳政を謝す。「るをや。」

將老已失子孫憂、將に老いむとして已に失ふ子孫の憂、

後來況接才華盛、後來況んや才華の盛なるに接せむとす、

衛は長さ八尺、孔徑一寸、下端より之を望み以て星辰を視る、と。堯は聖徳の清朗なるに比す。「八」懸清秋。秋にあたりて高くかかる。「九」三歲爲客。作者蓋し永泰二年ころ始めて裴に逢ひしならん。三歲は永泰元年より大曆二年まで。「一〇」寬邊愁。邊境に居る愁の心がくつろぐ。「一一」四岳。東西南北の四方の岳に屬する諸侯の長官。四岳のことは「尙書」舜典にみゆ。「一二」至理。理は治。「一三」漢二千石。二千石は郡の長官なり、表面の祿二千石を賜はる。漢の宣帝曰く、我と治を共にする者は唯だ良二千石か、と。「一四」分憂。天子の憂を分擔するをいふ。「一五」寄書。裴が作者に寄するなり。「一六」白鹽北。作者、移居東屯時、白鹽危嶠

北とあり。これ白雲屋北の居室へ書を寄せしなす。【二七】青羔裘 青き小羊の皮ころも。【二八】霜雪過光 過光とは寒光をひきかへさすをいふ。即ち寒氣を退却せしむる意。【二九】避錦袖 錦袖はにしきのそで、羔裘のそでを錦にて作りしもの、裘暖かなるゆゑ寒氣も袖より避けて去る。【三〇】龍蛇・銀鈎 竝に裘の手紙の筆勢をほめてたとへいふ。銀鈎は銀にて作りし筆をとめる「かぎ」。【三一】紫衣使者 裴の使者。【三二】辭復命 辭とは作者のもとより暇をひして去ること、復命とは裴に返事を申すこと。【三三】故人 裴をさす。【三四】佳政 よき政治より。【三五】將老 作者老いんとするをいふ。【三六】失子孫憂 子孫についての憂をなくする。裴の如き人物ならば作者自己の死後其の子孫を依託するに足る、故に憂なきなり。作者は卷十六「遺憤」詩に於て高適李白に對し、常恐遺棄 孤の句あり。自己親友の孤を撫育す、親友も亦自己の子孫を撫育しくるるならんと信するなり。【三七】後來 後日。【三八】況接 自己の子孫が接するなり。【三九】才華盛 裴の子孫の文學政事などの才華の盛なるなり。

【題義】施州の刺史裴某が手紙と裘とを贈つてくれたについて之に寄せた詩。大曆二年、東屯にての作ならんか。

【詩意】廟堂に立つて政治を爲すべき器である裴施州、むかし君といちどであうたことがあるが君の様なたぐひのものは無かつた。君の人物をたとへてみれば、金鐘や大鐘が東序に置かれてあるごとく、また玉壺の水や玉衡がすんだ秋のそらに懸つてゐることときものである。君とであうてからは自分の病氣も減じ、三年旅客となつてをるがかたわなかに居る愁もくつろいだ感がある。むかし堯の時に四岳といふ諸侯の取りしまり役があつて無上の治安を明かにし、漢の時代には祿二千石の地方長官があつて眞に天子の憂を分擔したといふ。(君はその四岳・良二千石の様なものである。) かやうな人物である君が白鹽崖の北に住む自分に幾たび手紙を寄せてくれたことか、また寒さがひどいとて自分に

青羔の裘を贈つてくれた。この裘を着ると霜や雪も錦の袖を避けて寒き光をひきかへさせるし、君の手紙の文字をみると徳のなかに龍蛇が動き、銀の鈎が蟠つてゐる様である。いま紫衣の使者が自分の處を辭して君の方へ返事をしにかへらうとする。それで自分は再拜の禮を以て故人である君の善政について感謝の意をのべる。君の様な知己を得たからには自分は老いかかつて、もはや子孫の事は君にまかせられるから、之に對するしんばいはなくなつたのである、そのみでなく將來には我が子孫たるものはさらに君の子孫の才華の盛なるのと交接することができらうであらう。」

鄭典設自施州歸

鄭典設、施州より歸る

吾憐榮陽秀。冒暑初有適。

吾は憐む榮陽の秀、暑を冒して初め適く有り。

名賢慎出處。不肯妄行役。

名賢は出處を慎む、肯て妄りに行役せず。

旅茲殊俗遠。竟以屢空迫。

茲の殊俗の遠きに旅するは、竟に屢空に迫らるるを以て

南謁裴施州。氣合無險僻。

南のかた裴施州に謁す、氣合して險僻を無みす。なり。

攀援懸根本。登頓入天石。

攀援す懸根の木、登頓す入天の石。

青山自一川。城郭洗憂戚。

青山自ら一川、城郭憂戚を洗ふ。

鄭典設自施州歸

聽^(二五)子^(二六)話^(二七)此^(二八)邦^(二九)。令^(三〇)我^(三一)心^(三二)悅^(三三)懌^(三四)。
 其^(三五)俗^(三六)則^(三七)淳^(三八)樸^(三九)。不^(四〇)知^(四一)有^(四二)主^(四三)客^(四四)。
 溫^(四五)溫^(四六)諸^(四七)侯^(四八)門^(四九)。禮^(五〇)亦^(五一)如^(五二)古^(五三)昔^(五四)。
 敕^(五五)廚^(五六)倍^(五七)常^(五八)羞^(五九)。盃^(六〇)盤^(六一)頗^(六二)狼^(六三)藉^(六四)。
 時^(六五)雖^(六六)屬^(六七)喪^(六八)亂^(六九)。事^(七〇)貴^(七一)當^(七二)匹^(七三)敵^(七四)。
 中^(七五)宵^(七六)愜^(七七)良^(七八)會^(七九)。裴^(八〇)鄭^(八一)非^(八二)遠^(八三)戚^(八四)。
 羣^(八五)書^(八六)一^(八七)萬^(八八)卷^(八九)。博^(九〇)涉^(九一)供^(九二)務^(九三)隙^(九四)。
 他^(九五)日^(九六)辱^(九七)銀^(九八)鈎^(九九)。森^(一〇〇)疎^(一〇一)見^(一〇二)矛^(一〇三)戟^(一〇四)。
 倒^(一〇五)屣^(一〇六)喜^(一〇七)旋^(一〇八)歸^(一〇九)。畫^(一一〇)地^(一一一)求^(一一二)所^(一一三)歷^(一一四)。
 乃^(一一五)聞^(一一六)風^(一一七)土^(一一八)質^(一一九)。又^(一二〇)重^(一二一)田^(一二二)疇^(一二三)闢^(一二四)。
 刺^(一二五)史^(一二六)似^(一二七)寇^(一二八)恂^(一二九)。列^(一三〇)郡^(一三一)宜^(一三二)競^(一三三)借^(一三四)。
 北^(一三五)風^(一三六)吹^(一三七)瘴^(一三八)癘^(一三九)。羸^(一四〇)老^(一四一)思^(一四二)散^(一四三)策^(一四四)。
 渚^(一四五)拂^(一四六)兼^(一四七)葭^(一四八)寒^(一四九)。嶠^(一五〇)穿^(一五一)蘿^(一五二)蕙^(一五三)霧^(一五四)。

子が此の邦を話するを聴けば、我をして心悅懌せしむ。
 其の俗は則ち淳樸にして、主客有るを知らず。
 温温たり諸侯の門、禮も亦た古昔の如し。
 廚に敕めて常羞に倍せしむ、盃盤頗る狼藉たり。
 時喪亂に屬すと雖も、貴に事へて匹敵に當つ。
 中宵良會に愜ふ、裴鄭は遠戚に非ず。
 羣書一萬卷、博涉務隙に供す。
 他日銀鈎を辱くす、森疎矛戟を見る。
 倒屣旋歸を喜ぶ、地に畫きて所歷を求む。
 乃ち聞く風土の質、又た重ぬ田疇開けたりと。
 刺史寇恂に似たり、列郡宜しく競ひ借るべし。
 北風瘴癘を吹く、羸老散策を思ふ。
 渚を拂へば兼葭寒し、嶠を穿てば蘿蕙霧ふ。

此身仗兒僕。高興潛有激。
 孟冬方首路。強飯取崖壁。
 歎爾疲駕駘。汗溝血不赤。
 終然備外飾。駕馭何所益。
 我有平肩輿。前途猶準的。
 翩翩入鳥道。庶脫蹉跎厄。

此の身兒僕に仗るも、高興潛に激する有り。
 孟冬方に首路、強飯崖壁に取らむ。
 歎す爾疲駕駘、汗溝血赤からず。
 終然外飾を備ふるも、駕馭何の益する所かあらむ。
 我有平肩輿有り、前途猶準的。
 翩翩鳥道に入る、庶はくは蹉跎の厄より脱せむ。

【字解】 一 鄉典設 典設郎は東宮に屬する官名、卷十八に「江雨有懷鄉典設」詩あり。 二 施州 前篇にみゆ。 三 榮陽 秀 榮陽は河南にある縣の名、鄭姓は其の地方の名族なり。 四 適 他地へゆくをいふ。 五 旅 旅は旅行をすること。 六 殊俗 風俗のちがつたとはいと、ころ。 七 屣 屣、貴窮をいふ。「論語」に回也屣と空として顔回つれに米びつのからなりしことを記せり。 八 裴鄭 前篇にみゆ。 九 氣合 意氣投合する。 一〇 無險僻 險はけはし、僻はかたよる、道路の險阻僻遠をいふ、無は無視するなり。 一一 懸根木 根あがりの樹木、「杜鵑」には榕樹なりといへるが、榕樹とは限らざるべし。 一二 登頓 のぼつたりやすんだり。 一三 入天石 石壁聳立して天にまでつきいるなり。 一四 憂戚 戚しうれひなり。 一五 子 鄭をさす。 一六 此 邦 施州をいふ。 一七 温温 温情あるをいふ。 一八 諸侯門 諸侯とは裴施州をさす。 一九 敕廚 寮所へ申しつける。 二〇 倍常産 ふだんの御馳走に倍加する。 二一 狼藉 みだれる貌。 二二 事貴當匹敵 事貴とは貴位の人に事へる、鄭が裴につかへるをいふ、當匹敵とは貴者をも自己と同輩のごとくみなし尊卑の差別をつけぬをいふ。 二三 愜良會 愜は心のかなふこと、良會はたのしき會合、即ち前述の宴會。 二四 非遠戚 遠戚は遠き親戚なり、これは事實關係は不明、裴鄭二姓必ず親戚の關係ありしならん。

【三】博涉 書物にひろくわたる。【四】務隙 事務のひま。【五】他日 往日。【六】辱銀鈎 要より手紙を受けしをいふ、銀鈎は前篇にみゆ。【七】森疎 いかめしくまばら。【八】矛戟 ほこ、筆勢の細くするどきをたとふ。【九】倒屣 屣はくつし、くつを倒にはくは狂喜して迎ふるさま。【一〇】旋歸 郡が慶州へかへりしこと。【一一】畫地 平地に地圖をかく。【一二】所歷 郡が經歴したところ。【一三】風土質 質は質性をいふ。【一四】又重 重は重ねて聞かぬをいふ。【一五】田疇開 田地のうれのひらけしこと。【一六】冠物・鼓借 後漢の光武帝、寇恂を潁川の太守とす、また汝南に移す、潁川に遊起るやその人民光武にむかひ復び寇君を借ること一年ならんと請ひたり。(下ノ上冊三五頁參看) 恂を以て妻に比す。【一七】萬老 自己のつかれ老いたること。【一八】散策 杖をついてぶらつく。【一九】清拂 水邊をゆくなり。【二〇】崎穿 山路をゆくなり。【二一】羅 おほふ、かぶさる。【二二】高興 遊覽の興のさかんになること。【二三】孟冬 冬の初月、十月。【二四】首路 はじめて路程にのぼる。【二五】強飯 むりに加飯する。【二六】取壁 路を崖壁に取る。【二七】爾 下文の駑貘をさす。【二八】駑貘 やくざうま。【二九】汗溝 馬の脊の中部。【三〇】血不赤 名馬は血を汗にすといふ、不赤といへばただの無色の汗をだすなり。【三一】終然 つひに。【三二】外飾 外部のかざり。【三三】車 駕馭 車につけ、あやつる。【三四】平肩輿 肩でかくかこ。【三五】準的 目的、めざすまこと。【三六】關關 かこの飛ぶ貌。【三七】鳥過 高き山路をいふ。施州に妻を訪はんとするなり。【三八】蹶跌厄 駑馬のつまづく災難。

【題義】 典設郎鄭某が施州から歸つたをりの感じをのべた詩。大曆二年十月の作。

【詩意】 自分は氣の毒におもうた、蔡陽鄭氏の優秀な人物たる君が著きを冒して初め他方へかけていつたことを。名ある賢人は出處進退をつつしみ、みだりにたびにでることはせぬものである、それに風俗のちがつた遠方へたびしにでたのはつまり貧窮に迫られての事であつたのだ。君は南のかた妻施州に面會にいつたのだ。先方と意氣投合してゐることだから、途中の險僻なことなどは眼中に無かつた。あるひは根あがりの木をよちたり、あるひは天までつき入つてそびえ立つた石のうへへあが

つたりして、つひに青山のあひだにおのづと一川の流れてゐる施州について、その城郭の様子ですつかりうれひのこころを洗ひ去つた。君が施州の様子をはなすのをきくとじぶんのこころはうれしくなる。施州の風俗は淳樸で一般人民のあひだでは主人もお客も區別がないといふ親密さであり、またあたたかみのある州の長官の門でも古代のままの禮のこつてゐる。長官はその臺所にいひつけて客にふだんの倍もある御馳走をすすめさせる、宴席では盃盤頗る狼藉たるものがある。いまの時世は喪亂のときであるのかかはらず、ここでは尊貴の人に對しても同輩に對するとおなじであり、夜なかのたのしき會に於て主客は意になうた満足を得る、もとより裴氏と鄭氏とは親戚であるといふ關係もあるが、それから裴君は一萬巻もさまざまな書籍をたくはへ、公務のひまにはそれ等にひろくめをとほす。また前日裴君から手紙をもらつたがその文字は銀鈎のごとく、森疎たる矛戟をみるがごとくであつた。君はその裴君のゐたところから歸られたので、自分は狂喜してくつを倒にひつかけてでむかへ、地面に圖をかいてもらつて經歷談をもとめる。施州の風土がどんな性質だといふことをきいたり、また田野の開拓されてゐる様子をもきく。刺史裴君はむかしの寇恂に似た人物だから諸郡が競うて同君を借りたいとねがふのもあたりまへのこととおもふ。いまや北風があつて瘴癘の氣を吹き去つて、つかれて老いたこの身も散歩でもしたくなつた。渚をぶらつけば兼霞をわたる風寒く、高き山の路をくぐりゆけば蘿や葛がおほひかぶさる。こどもらや僕によりすがることからだでは

あるが、遊覽の興味がそれとなく激發されてゐる。だから冬の初めにかどでのほり無理にもご飯をたべたして元氣をつけて崖路をとほらうとかんがへる。ところでのりものであるが、やくざな驚馬なんぞは脊中から赤い血の汗もださぬのだ。だからいくらそとの見えばかり十分に飾つたところが、そんなものを御してもなんにも役にたたぬ。それよりも自分には人肩でかく輿がある。これで前途を我がめざすのとみる、さうしてこのりものでえつさえつさと高山の鳥のかよひちへとくりこむ、かやうにすれば途上で驚馬につまづかれるといふ様な災難からのがれることができるであらう。」

觀公孫大娘弟子舞劍器行并序

公孫大娘が弟子の劍器を舞ふを觀る行 并に序

大曆二年、十月十九日、夔州別駕元持宅、見臨穎李十二娘舞劍器、壯其蔚跂、問其所師、曰、余公孫大娘弟子也、開元三載、余尚童稚、記於郾城、觀公孫氏舞劍器、渾脫、瀏灘、頓挫、獨出冠時、自高頭宜春、梨園二伎坊內人、洎外供奉舞女、曉是舞者、聖文神武皇帝初、公孫一人而已、玉貌錦衣、〔……〕況余白首、今茲弟子、亦匪盛顏、既辯其由來、知波瀾莫二、

撫事慷慨、聊爲劍器行、昔者吳人張旭、善草書、書帖數、嘗於鄴縣、見公孫大娘舞西河劍器、自此草書長進、豪蕩感激、卽公孫可知矣。

大曆二年、十月十九日、夔州の別駕元持が宅にて、臨穎の李十二娘が劍器を舞ふを見て、其の蔚跂たるを壯として其の師とする所を問ふ。曰く、余は公孫大娘が弟子なりと。開元三載、余尚は童稚なり、記す郾城に於て公孫氏が劍器・渾脫を舞ふを觀しことを。瀏灘頓挫、獨出冠たり。高頭の宜春・梨園二伎坊の内人より、外供奉の舞女に洎ぶまで、是の舞を曉る者は、聖文神武皇帝の初め、公孫一人のみ、玉貌錦衣〔……〕況んや余白首、今茲の弟子も、亦た盛顏に匪ず、既に其の由來を辯じ、波瀾二莫きを知り、事を撫して慷慨し、聊か劍器行を爲る。昔者吳人張旭、草書を善くし、帖に書すること數なり。嘗て鄴縣に於て、公孫大娘が西河の劍器を舞ふを見る、此より草書長進し、豪蕩感激すと。卽ち公孫は知る可し。

【字解】 〔一〕 公孫大娘 詩序に見ゆる如く玄宗の開元時代の舞の妙手なり。大娘とは中年女子の稱。 〔二〕 弟子 詩序に見ゆる公孫大娘が弟子なる李十二娘。 〔三〕 劍器 舞の名。舞に文舞・武舞、或は健舞・軟舞の別あり、劍器は健舞に屬す。段安節が「樂府雜錄」に曰く、健舞曲に殺大・阿連・柘枝・劍器・胡旋・胡騰等あり、軟舞曲に涼州・綠腰・蘇合香・扇舞・團圓旋・甘州等あり、と。此等の舞は大抵西域地方より傳來せしものなり。張爾公が説によれば劍器は女妓を用ひ男裝せしめ空手にて舞ふものなりと、仇氏は因りて劍器を以て刀劍と爲すの誤なることをいへり。然れども余は此の詩篇を案するに劍を持ちて舞ふものならんと考ふ。 〔四〕 別駕 州の屬官。 〔五〕 元持 一本には持を特につくる。 〔六〕 臨穎 地名、河南許州に屬す。 〔七〕 李十二娘 作者の「秋日夔府詠懷」詩の自注を考ふるに

觀公孫大娘弟子舞劍器行並序

即ち李仙奴といふ者なり。【八】 蔚。蔚とは文あるさま、鼓とは雄壯なるさま。【九】 其所。其とは李をさす。【一〇】 開元三載。開元三載は作者四歳の時なり、四歳の時にても舞を觀しことなどは記憶するも怪むに足らず。開元三載より大曆二年まで凡そ五十三年なり。【一一】 麗城。地名、河南許州に屬す、臨穎より南にあり。【一二】 公孫氏舞劍器。澤脫。澤脫も舞の名なり。「明皇雜錄」に曰く、上(玄宗)素音律を曉る、安祿山、白玉の簪管數百事を獻す、梨園に陳す、是より音響人間に類せず、諸公主及び魏國以下競ひて貴妃が弟子となす。授曲の終りに皆廣く進奉あり。時に公孫大娘、能く闌里曲及び梨園將軍・滿堂勢・西河劍器・澤脫の舞を爲す、妍妙皆時に冠絶す、と。【一三】 擲。擲はなめらかなるさま。【一四】 頓挫。擲勢の急停止をいふ。【一五】 獨出。ひとり傑出する。【一六】 冠時。時の第一人者たること。【一七】 高頭宜春梨園二伎坊内人。宜春・梨園の二伎坊の高頭の内人の意。高頭の二字は内人へかかる。高頭は前頭の義、天子の御前にある優秀のものをさす。崔令欽が教坊記に曰く、右教坊は光宅坊(坊は街の意)に在り、左教坊は延政坊に在り。右には善歌多く、左には工舞多し。妓女宜春院に入れば之内人といひ、亦前頭人ともいふ、常に上の前に在るを以てなり、と。宜春・梨園については「雜錄」に紀事あり、曰く、開元二年正月、教坊(歌舞の教練場)を蓬萊宮側に置く。上(玄宗)自ら法曲を教ふ、之を梨園の弟子といふ。天寶の初、東宮に即きて宜春北院を置き宮女數百人に命じて梨園の弟子となす。梨園は光化門の北に在り。光化門とは禁苑南面の西頭第一門(最西端の門)なり、と。元來伎女のすぐれし者を宜春院に入れしものにて、更に其の中よりすぐれし者を選びて梨園の弟子となせしなり。二伎坊とは宜春と梨園との二教坊をさす。【一八】 泊。及なり。【一九】 外供奉舞女。宜春・梨園のもの以外にて御としをし御用をつとむる舞女。【二〇】 聖文神武皇帝。玄宗の尊號。【二一】 玉貌錦衣。此の句と下の「況余白首」とは文氣相接せず、必ず脱文あるべきこと申涌光已に之を言へり。誠に然り。脱文の處には公孫大娘の逝去せしこと言及せる一節あるべきものなり。【二二】 今茲弟子。弟子は李十二娘をさす。【二三】 渡瀾。渡瀾莫二。舞の手ぶりの變化の工合が師弟同一なること。【二四】 推事。社事に備うてかんがへる。【二五】 聖旭。旭がこと卷二「飲中八仙歌」其の曲にみゆ。韓愈が送高閑上人序に、「往時張旭草書を善くし他伎を治めず、喜怒窮、憂悲愴、思恨思慕、酣醉無聊不平、心に動くれば必ず草書に於て之を發す。天地事物の變、喜ぶべく傳くべきもの、一に書に寓す、故に旭の書變動す、猶ほ鬼神の端倪すべからざるがことし」といへるも旭の書風をうかがふべし。【二六】

鄆縣。河南彰德府臨漳縣。【二七】 西河劍器。上にみゆ。【二八】 長遊。わざすぐれすむ。【二九】 豪蕩感激。書風をいふ。【三〇】 即公孫可知矣。知るべしとは其の伎の神妙なること推して知るべきをいふ。

昔有佳人公孫氏

昔佳人公孫氏有り、

一舞劍器動四方

一たび劍器を舞へば四方を動かす。

觀者如山色沮喪

觀者山の如く色沮喪す、

天地爲之久低昂

天地之が爲に久しく低昂す。

燿如羿射九日落

燿として羿の九日を射て落すが如く、

矯如羣帝驂龍翔

矯として羣帝の龍を驂にして翔るが如く

來如雷霆收震怒

來るときは雷霆の震怒を收むるが如く、

罷如江海凝清光

罷むときは江海の清光を凝らすが如し。

絳脣珠袖兩寂寞

絳脣珠袖兩つながら寂寞、

晚有弟子傳芬芳

晩に弟子の芬芳を傳ふる有り。

臨穎美人在白帝

臨穎の美人白帝に在り、

【字解】

【一】 如山。多きをいふ。
 【二】 色沮喪。神奇願くべくして觀者の氣色はばみ失はる。
 【三】 爲之。舞ふがために。
 【四】 低昂。さがり、あがる。これは天地が劍光に映じてその劍を動かすたびに天がしたになり、地がうへになるやうに見ゆるないうならん。單に舞手を高下したりとて、天地低昂と形容するは中らぬこととおもはる。
 【五】 燿。燿の字字書に見えず。鄆注に灑灼なりといへり。かがやくさまをいふならん。
 【六】 羿射九日落。「淮南子」に堯の時十日並び出づ。堯、羿をして射て九日に中てしむ。日鳥(日の中に鳥ありと考へらる)皆死し、其の羽翼

妙舞此曲神揚揚。妙に此の曲を舞うて神揚揚たり。

與余問答既有以。余と問答するに既に以有り、

感時撫事增惋傷。時に感し事を撫して増し惋傷す。

先帝侍女八千人。先帝の侍女は八千人、

公孫劍器初第一。公孫の劍器初めより第一。

五十年間似反掌。五十年間反掌に似たり、

風塵瀕洞昏王室。風塵瀕洞として王室に昏し。

梨園弟子散如煙。梨園の弟子散する煙の如し、

女樂餘姿映寒日。女樂の餘姿寒日に映す。

金粟堆南木已拱。金粟堆南木已に拱す、

瞿唐石城草蕭瑟。瞿唐の石城草蕭瑟たり。

玳筵急管曲復終。玳筵急管曲復た終る、

樂極哀來月東出。樂極まり哀來りて月東より出づ。

を射すと、といふ語あり。九つの太陽が射おとされて落つる如しとは、やはり劍光の燦爛とちたつくさまを言ふものと見ざれば意義をなさざるべし。【七】熾。あがること。【八】

羣帝。羣帝は天上の羣仙、唐はそへうまにすること。夏侯玄が賦に又如東方羣帝兮、【九】龍駕。而翻翔とみゆ。【一〇】雷霆收震怒。雷霆がなりをしづめる。【一一】江海

灑清光。海水が鏡面の如くしづかなさま。【一二】綺屏珠袖。あかさくちびる。珠をかざつたそで。屏は容貌についていひ、袖は舞態についていふ。【一三】明皇雜錄の語を借りていはば綺屏は「解」をいひ、珠袖は「妙」をいへるなり。【一四】兩寂寞。兩とは屏袖の二をなす。寂寞は死去せし後をいふ。【一五】晚。公孫大娘の晩年をいふ。【一六】弟子。李。

老夫不知其所往。老夫知らず其の往く所を、

足繭荒山轉愁疾。足繭して荒山に轉た愁疾なり。

【一〇】傳芬芳。かたりをつたへる。餘風をつたへしこと。【一六】臨。美人。李。【一七】白帝。白帝城。

【一〇】傳芬芳。かたりをつたへる。餘風をつたへしこと。【一六】臨。美人。李。【一七】白帝。白帝城。【一八】問答。序文に見ゆる師弟の關係についての問答。【一九】侍女。伎女等をいふ。【二〇】五十年間。上に述べし如く開元三載より大曆二年までは五十三年なれども大略のところにて五十といふ。【二一】反掌。容易に變化せしをいふ。【二二】木已拱。拱はひとがかへ、成長せしこと、即ち年數たちしをいふ。【二三】瞿唐石城。瞿唐峽のあるところの石地の城、夔州の城をなす。【二四】玳筵。うつくしきさかむしる、夔州別駕元持が宅の席をいふ。作者がこの李娘の歌を聞きしことは已に卷十九の「秋日夔府詠懷」詩に自ら注して「都督柏中丞が庭にて梨園の弟子李仙奴が歌を聞く」といひ、それに關して同詩の本文に、高宴請侯禮、佳人上客前、哀絳傷老大、華屋變神仙、南内開元曲、當時弟子傳、法歌聲變轉、滿座涕淚深、とあるによりて知らる。今回はまた李の舞を觀しなり。あはせて當時のさまを想見するに足れり。【二五】急管。急に吹く竹管。【二六】老夫。自己をなす。【二七】不知其所往。其は自己をなす、所往とは將來歸往すべき處なり。此の句は自己の前途につきひろくみわたして言ひし語なり。【二八】足繭。足には蠶のまゆの様な豆ができる。道路に奔走するをいふ。蘇秦が足に繭を重ねて日に百(百里)にして合りしこと「戰國策」に見ゆ。【二九】轉愁疾。仇注に、足繭行。還。反。愁。太。疾。一。臨。去。而不忍其去也、といへるは、疾を「とし」、「はやし」と訓じ、自己平日の踐行も此の場をたち去らんとするときばかりははやすぎる様に感ずと解けるなり。沈德潛其の説を襲ひたり。これに依れば「其所往」には仇氏注せざるも「其」を李に屬せしめてみしやも測られず。仇氏の説には服する能はず。愁疾とは衰疾などの如く愁と疾との二事をならべし句とみるべし、愁へ且疾むしをいふなり。

【題義】公孫大娘の弟子李仙奴といふものが劍器の舞をまふのを観てつくつたうた。大曆二年の十月十九日に自分は夔州別駕元持が宅で臨穎の李十二娘が劍器を舞ふのを見てその壯麗なのを愛し、先生はだれか」とたづねたら「公孫大娘の弟子だ」とこたへた。自分はむかし開元三年にまだこどもであつたが、郾城で公孫大娘が劍器・渾脱を舞ふのをみたことをおぼえてゐる。その舞の様子はなだらかでまた急激の變化があつて時流を抜いてゐた。そのころ御所の宜春院や梨園などの教坊の高頭内人とよばれる人からその以外の御用の舞女までのなかで、この舞を知つてゐるものは聖文神武皇帝(玄宗)の御代に公孫氏ただひとりであつた。その玉貌錦衣は「……」まして自分は白髪あたまになり、いまこの弟子(李)さへも盛りの色香がうせてゐる。自分は已に舞の由來をわきまへて、師匠と弟子との舞の手ぶりの變化はひとすぢであることを知り、むかしのことにそうてかながへてなげかはしくなり、聊かこの劍器のうたをつくつた。まへかた吳の人で張旭は草書がうまく、たびたび帖などに書いたものだ。旭はあるとき鄴縣で公孫大娘が西河の劍器を舞ふのを見て、それ以來草書の伎がぐつと進み豪蕩で感激した様な書風になつたといふことだ。旭が草書にそれほどの影響をあたへた公孫大娘のわざの神妙さは推して知るべきである。

【詩意】むかし公孫氏といふ美人があつて、ひとたび劍器の舞をまふと四方の人人を感動させた。彼女の舞をみると山ほどたくさんの觀客はかほつきもばんやりしてしまひ、いつまでも天地が互に高

低してゐる様なこちがうせぬ。(その舞うてゐる様子をいふならば)ちやかちやかとひらめいて舞が九つの太陽を射落したかの如く、矯然とうねりあがるさまは天の羣仙が龍を騰として翔けるが如く、すうつと來るときは雷霆も怒りをしづめたかの如く、まつたく舞ひをはつた時は江海の水面すみわたつて清光を凝らしてゐるかの如くである。この妙技をもつた彼女のあかい唇も珠の袖もその後ほともにひつそりと述べたが晩年に彼女のかをりを傳へた弟子がでた。それは臨穎の美人李娘である。この美人は白帝城にきてゐて、おなじ劍器の曲を舞ふに上手であつて、それをまふとき神氣すこぶる揚揚得意の風がある。自分と問答してみるとこの女の舞は仔細のあるもので偶然のものでないことがわかつたので、自分は時のかはりに感じ、往年にそうてかながへてますますをしみいたむの念を生じたのである。先帝(玄宗)のおそばにかしづいた伎女は八千人もあつたがそのうちで公孫大娘の劍器の舞はもとより第一位であつた。あのころから五十年といふものは手のひらをかへす如く容易にかはつて兵馬の塵がもやくやおこつて王室を昏くおほうた。梨園の弟子たちも煙のやうに散りちりになり、わづかに伎女隊の片割れの姿が冬の日に映うてうかびでたのだ。先帝の陵金粟堆の南には木がひとかかへにも生長し、ここの瞿唐峽の石城で草の葉わたる風がさびしく吹いてゐる。りつばなさかむしろに竹管急に奏せられて舞曲は終り、樂みのはてには哀れさが生じて月が東の方からあらはれた。このおやちはこのさきどこへ往いてよいのやらわからず、前途茫茫で荒れたる山に豆足をひき

すりながらいよいよしんばいと疾病との深みへおちてゆくばかりである。」

寫懷二首

懷を寫す 二首

勞生共乾坤。何處異風俗。生に勞せしめらるるは乾坤を共にす、何の處か風俗を異
冉冉自趨競。行行見羈束。冉冉自ら趨競して、行行羈束せらるる。
無貴賤不悲。無富貧亦足。貴無くんば賤悲します、富無くんば貧も亦た足る。
萬古一骸骨。隣家遞歌哭。萬古一骸骨、隣家遞に歌哭す。
鄙夫到巫峽。三歲如轉燭。鄙夫巫峽に到る、三歲轉燭の如し。
全命甘留滯。忘情任榮辱。命を全くして留滯に甘んじ、情を忘れて榮辱に任す。
朝班及暮齒。日給還脫粟。朝班暮齒に及ぶ、日給還た脱粟。
編蓬石城東。采藥山北谷。蓬を編す石城の東、藥を采る山北の谷。
用心霜雪間。不必條蔓綠。心を霜雪の間に用ふ、條蔓の綠なるを必とせず。
非關故安排。曾是順幽獨。故らに排に安んずるに關するに非ず、曾ち是れ幽獨に順

達士如弦直。小人似鈎曲。達士は弦の直きが如く、小人は鈎の曲れるに似たり。
曲直吾不知。負暄候樵牧。曲直は吾知らず、暄を負ひて樵牧を候ふ。

【字解】【一】勞生。『莊子』に、大塊載我。以形。勞我以生。とみゆ。勞生は生に勞せしむるなり。【二】共乾坤。同一天地内にあるをいふ。【三】異風俗。風俗異ならずといふにはあらず、異を論ずるに及ばざるをいふ。【四】冉冉。進行の貌。【五】趨競。おもむきさそふ。名利の途におしむく。【六】行行。一步一步。【七】羈束。からだをなごし縛られる。【八】無貴二句。阮籍が大人先生傳に、無貴、則賤者不悲、無富、則貧者不爭、各安於身。而無所求、とみゆ。【九】一骸骨。ひとしく死して骨となる。【一〇】歌哭。笑歌悲哭する。【一一】鄙夫。いやしきなと、自己をさす。【一二】三歲。永泰元年、大曆元年、二年。【一三】如轉燭。蔡夢弼曰く、轉燭は燭影風に隨ひて轉じて定まる無きをいふなり、と。王洙曰く、光景の迅速なるをいふ、と。浦氏曰く、猶ほ轉瞬といふがごとし、と。諸注いづれも分明ならず。愚案するに、轉燭とは一燭火盡きて更に他の一燭に火をうつすをいふならん、即ちつぎからつぎへと轉するをいふ。これによりて一年一年と過ぎゆくさまにたとふ。【一四】朝班及暮齒。仇注に云ふ、昔班、朝班、而今已暮年矣、と。蓋し非なり。これ暮年に及びて朝班を得たるをいふ。作者もとよしかつて左拾遺とはなりしもその事は言はずして晩年工部員外郎となりし點のみについていへるなり。【一五】編蓬。蓬をあみて戸とするをいふ、東方朔が非有先生論に云ふ、深山の中に居り、覆土爲室、編蓬爲戸、と。【一六】石城。豐州の石地の城。【一七】山北谷。山北の谷とは漢西の居よりいば蓋し白谷をいふ。【一八】用心霜雪間。秋冬にも采るをいふ。【一九】不必條蔓綠。春夏の際とはかざらざるをいふ。條はえだ、蔓はつる。【二〇】安排。排とは造化自然の力によりて推し進らせらるること、安排とはそれに安んじて居るなり、『莊子』に、安、排而去化、乃入於寥天、とあり、『莊子』に又た委順といふことあり。運命のまにまに身をまかせておこなをいふ。安排も同意なり。【二一】順幽獨。幽棲孤獨の本性に順ひさからばぬ。【二二】達士。達觀したひと。【二三】弦直。鈎曲。後漢の順帝末の童謠に云ふ、直如弦、死如遺。【二四】鈎、封。公侯、と。【二五】負暄。ひなたぼ。【二六】樵牧。樵夫牧童のなすさまなうかがふ。

【題義】 自己のむねのうちを寫しのべた詩。大曆二年冬の作。

【詩意】 どこでいかに風俗がちがつてゐようと、みなものが生活といふことに骨折らせられてゐることは天地に共通してゐることだ。生きるために次第に名利の途へきそひはしるまに一步一步その名利のつなにはばられてしまふ。貴といふことがなくば賤者も悲しまぬし、富といふことがなくば貧者も貧で満足してゐるのだ。萬古の久しきにわたつてかんがへるとだれも同一骸骨になるのだが、さりととも心づかずに隣りあひでたがひに悲歎歌哭をしつつある。』 自分は巫峽へきてから三年はまたたくまにすぎた。どうやら生命を全くして滯留に甘んじ、喜憂の情を忘れて榮辱のなるがままになつてゐる。晩年になつてから朝位をわかちたまはりはしたが、日やつぱり玄米にありついてをり、石城の東に蓬をあんて戸とし、山北の谷で藥草を采つてくらしてゐる。その藥草をとるには條や蔓の縁なるときとはかざらず、霜や雪がふつたときでも怠らずとつてをるのである。こんなことをしてゐるのは「莊子」がいふやうな「安」排といふことをわざとやるのではなく、自己の曲獨の本性にさからはぬといふにほかならぬのである。』 達士は直きこと、弦の如く、小人は曲れること、鈞の如くだとときが、自分は曲だの直だのといふことはわからぬ、ただ日なたばこをしながら樵牧のさままでのぞいてゐるだけである。』

〔一〕

〔二〕

夜深坐南軒。明月照我膝。

夜深くして南軒に坐す、明月我が膝を照らす。

驚風翻河漢。梁棟日已出。

驚風河漢を翻す、梁棟日已に出づ。

羣生各一宿。飛動自儔匹。

羣生各一宿す、飛動自ら儔匹す。

吾亦驅其兒。營營爲私實。

吾も亦た其の兒を驅る、營營たるは私實の爲なり。』

天寒行旅稀。歲暮日月疾。

天寒くして行旅稀なり、歲暮れて日月疾し。

榮名忽中人。世亂如蟻蝨。

榮名忽ち人中に中る、世亂れて蟻蝨の如し。

古者三皇前。滿腹志願畢。

古者三皇の前、滿腹志願畢る。

胡爲有結繩。陷此膠與漆。

胡爲れぞ結繩有りて、此の膠と漆とを陷るるや。

禍首燧人氏。厲階董狐筆。

禍首は燧人氏、厲階は董狐が筆。

君看燈燭張。轉使飛蛾密。

君看よ燈燭張る、轉た飛蛾をして密ならしむ。』

放神八極外。俛仰俱蕭瑟。

神を放つ八極の外、俛仰俱に蕭瑟たり。

終然契眞如。得匪金仙術。

終然眞如に契る、金仙の術に匪ざるを得むや。』

【字解】 〔一〕 羣生、もろもろの生物。 〔二〕 一宿、一夜の雜宿をなす。 〔三〕 飛動、禽獸をいふ。 〔四〕 儔匹、同類共に生を處

【一】「營營」はたらく貌。【二】私實「國語」の楚語に、善、衆、衆、實とあり、注に實、財也とみゆ。私實は私有の財物をいふ。
 【三】中人、中の字は去聲、「あたる」義なり。中、病、中、寒の中の如し。名利心の毒毒にあてられるをいふ。【四】蠶織、ともに「しらみ」蟲。【五】三皇、古傳説に、上古に天皇氏・地皇氏・人皇氏ありといふ。唐の司馬貞が三皇本紀には庖犧氏・女媧氏・神農氏を以て三皇とす。【六】胡爲、何爲に同じ。【七】結繩、「易」の繫辭下に上古、結繩して治まる。後世聖人之に易ふるに書契を以てすとみえ、三皇本紀に庖犧が聖徳あり書契を造り以て結繩の政に代へしことを記す。結繩は未開民族の爲す思想交換、保存のための方法、繩を結びて或るしるしとするなり。我々の文字の代りなり。【八】陪、おとしいる。破壞せしをいふ。【九】膠漆、交情の密着するをいふ。古詩に、以膠投漆中、誰能別離、此、とみゆ。【一〇】禍首、禍を生ぜしめた發端人。【一一】燧人氏、古代の王、燧を鑽して火を出だし、人に火食することを教へしものなりといはる。庖犧よりも以前にありと。【一二】厲階、わざはひの段階をなせしもの、語は「詩」左傳にみゆ。【一三】董狐、春秋時代の晉の史官、直筆せしため殺さる。「左傳」にみゆ。【一四】燈燭、以て名利に比す。【一五】飛蛾、蛾の蟲、以て一般俗人に比す。【一六】八極、八方のはて。【一七】僂仰、俯仰。【一八】俱盡、俱と一切共にの意、蕭瑟はさびしき貌、消滅の姿。【一九】契眞如、眞如は佛敎教理の極致、悟りの最上。【二〇】得無、得、無、非の意。【二一】金仙術、釋典にては佛を大覺金仙と號す。金仙の術とは佛法をいふ。

【詩意】夜深けて南むきの軒にすわつてゐると明月が膝のうへを照らす。ざわつく風があまのがらはを吹きおとしたかとおもふと、梁棟の上にははや太陽があらはれる。すべての生物がそれぞれ一夜のやどりををはつて禽獸そのたぐひを求めてはたらく。自分もことどもらを驅りたててせつせとはたらくのは自己の財物をつくらんがために外ならぬ。いま天が寒くなつてたびびとも稀になつてゐる、月日のすぎるのははやくて歳がくれになつた。かんがへてみると世のなかの人人は榮譽ある名のために中毒してゐるので、そのため世はみだれてしらみ蟲がわいてゐるごとくになつてゐる。おほむかしに

三皇の以前には人は腹いづばい物をつめたらそれだけで志願はすんでゐたのだ。それになんで結繩などといふことをはじめ、人間の天然の親密をうちこはす様にしたのだ。それをおもふと禍の發端人は燧人氏であり、厲厄の階梯をつくつたものは董狐の直筆だというてもよい。看たまへ燈燭がもちだされると火をしたうて蛾の蟲が密集してくるではないか。我が精神を八方のはてに放つてみると、一俯一仰のあひだに一切萬有はみんな消滅してさびしいものである。自分もしまひには眞如の理と契るためには佛法の手段によるほかにないのではあるまいか。」

309
65

本朝の歴史
一、神代卷
二、神代卷
三、神代卷
四、神代卷
五、神代卷
六、神代卷
七、神代卷
八、神代卷
九、神代卷
十、神代卷
十一、神代卷
十二、神代卷
十三、神代卷
十四、神代卷
十五、神代卷
十六、神代卷
十七、神代卷
十八、神代卷
十九、神代卷
二十、神代卷
二十一、神代卷
二十二、神代卷
二十三、神代卷
二十四、神代卷
二十五、神代卷
二十六、神代卷
二十七、神代卷
二十八、神代卷
二十九、神代卷
三十、神代卷
三十一、神代卷
三十二、神代卷
三十三、神代卷
三十四、神代卷
三十五、神代卷
三十六、神代卷
三十七、神代卷
三十八、神代卷
三十九、神代卷
四十、神代卷
四十一、神代卷
四十二、神代卷
四十三、神代卷
四十四、神代卷
四十五、神代卷
四十六、神代卷
四十七、神代卷
四十八、神代卷
四十九、神代卷
五十、神代卷
五十一、神代卷
五十二、神代卷
五十三、神代卷
五十四、神代卷
五十五、神代卷
五十六、神代卷
五十七、神代卷
五十八、神代卷
五十九、神代卷
六十、神代卷
六十一、神代卷
六十二、神代卷
六十三、神代卷
六十四、神代卷
六十五、神代卷
六十六、神代卷
六十七、神代卷
六十八、神代卷
六十九、神代卷
七十、神代卷
七十一、神代卷
七十二、神代卷
七十三、神代卷
七十四、神代卷
七十五、神代卷
七十六、神代卷
七十七、神代卷
七十八、神代卷
七十九、神代卷
八十、神代卷
八十一、神代卷
八十二、神代卷
八十三、神代卷
八十四、神代卷
八十五、神代卷
八十六、神代卷
八十七、神代卷
八十八、神代卷
八十九、神代卷
九十、神代卷
九十一、神代卷
九十二、神代卷
九十三、神代卷
九十四、神代卷
九十五、神代卷
九十六、神代卷
九十七、神代卷
九十八、神代卷
九十九、神代卷
一百、神代卷

終